

長野市の埋蔵文化財第2集

浅川西条

—長野市に於ける扇状地形上の平安時代集落—

1975.7

長野県住宅供給公社
長野市教育委員会





網代地草鳥鏡（実物大）

直径9.3cm、厚1mmの白銅製の凸面鏡で、裏面の文様は三角形に区画され、外に三種の網代文を内に一本の草本と二羽の鳥を配している。それは垣根内の庭に遊ぶ鳥と草木を表現しているようだ。

序

近年、社会の急激な変化によって開発事業がさかんに行なわれておりますが、一方祖先が残した貴重な文化財が破壊され、失われることは誠に残念なことがあります。永い歴史に埋もれた先人の文化を知り、これから文化の創造に役立てることはもちろん、これを大切に保存して後世に伝えることは、私達に課せられた大きな責務であると思います。

今回、長野市の北部に位置する浅川西条地区に長野県住宅供給公社が住宅団地を造成するにあたり、分布調査を実施した結果、ここが遺跡地であることがわかり、長野県住宅供給公社の御協力により長野市教育委員会が調査発掘をいたしました次第であります。規模が25,000m²もありましたので、相当の日数と費用を要しましたがここに所期の目的を達することができましたことは、調査団長 米山一政氏、調査主任 小林孚その他諸氏の献身的努力の賜と衷心から敬意と感謝を申し上げます。

終りに埋蔵文化財に対する住民の理解を深める一助に本調査報告書がなりますことを祈念いたしますとともに、本調査に御協力くださった地域の皆さん及び関係の皆さんに対しまして厚くお礼申し上げます。

昭和51年3月

長野市教育委員会

教育長 中 村 博 二

例　　言

- 1 本書は昭和50年度に長野県住宅供給公社と長野市教育委員会との契約に基づいた発掘調査報告書である。
- 2 本書は調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することを重点においた。尚遺物の詳細については図前頁に表にして記した。
- 3 遺構図は小平が担当整図をした。
- 4 遺物の実測は、小林秀夫、矢口、小平、片山が担当し、整図は矢口が行なった。
- 5 写真は小林^亨、小林秀夫が担当した。
- 6 遺物実測中、推定復元可能なものは、鎮線で、黒色処理されるものは■■■、灰釉陶器の施釉範囲を細線と△で、それぞれ表示した。
- 7 遺構・遺物の担当者の分担は、調査員協議をして決め、それぞれ文末に文責を記した。
- 8 遺物や関係図面、諸記録は長野市教育委員会で保存している。
- 9 本書の編集は小林^亨・矢口忠良・小平和夫が行ない、米山一政調査団長の校閲を受けた。
- 10 印刷関係の業務は、事務局が担当した。

本文目次

序 文	長野市教育委員会教育長 中 村 博 二
例 言	
第 1 章 長野市浅川西条遺跡分布調査の経過	1
第 1 節 分布調査に至る経過	1
第 2 節 分布調査とその結果	1
1 分 布 調 査	1
2 今後の処置	3
3 調査団の編成	3
第 2 章 長野市浅川西条遺跡発掘調査の経過	4
第 1 節 発掘調査に至る経過	4
第 2 節 事前打合会日誌	4
第 3 節 調査団の編成	4
第 4 節 調 査 日 誌	5
第 5 節 発掘調査参加学校生徒一覧	5
第 3 章 長野市浅川西条遺跡周辺の環境	11
第 1 節 遺跡の地理的環境	11
1 自然的環境	11
2 土地利用の変容	11
第 2 節 遺跡の歴史的環境	12
第 4 章 遺構と遺物	14
第 1 節 住居址	14
1 第 1 号住居址	14
2 第 2 号住居址	14

3 第3号住居址	15
4 第4号住居址	16
5 第5号住居址	16
6 第6号住居址	16
7 第7号住居址	17
8 第8号住居址	17
9 第9号住居址	17
10 第10号住居址	18
11 第11号住居址	18
12 第12号住居址	18
13 第13号住居址	19
14 第14号住居址	19
15 第15号住居址	20
16 第16号住居址	20
17 第17号住居址	20
18 第18号住居址	21
19 第19号住居址	21
20 第20号住居址	22
21 第21号住居址	22
第2節 井戸址	22
第3節 土 塚	23
1 第1号土壤	23
2 第2号土壤	23
3 第3号土壤	23
4 第4号土壤	23
第4節 溝 址	24
第5節 その他の遺物	24
第5章 浅川遺跡について	26
第6章 結 語	29

挿図目次

卷頭挿図 綱代地草鳥鏡	口絵裏
第1図 浅川西条遺跡周辺主要遺跡分布図	43
第2図 浅川西条遺跡地形図	44
第3図 浅川西条遺跡付近の聚落	45
第4図 浅川西条遺跡駒沢川の断面図	45
第5図 浅川西条遺跡遺構分布図	46
第6図 第1・2号住居址	47
第7図 第3・4・9号住居址	48
第8図 第5・6・7・8号住居址	49
第9図 第10・11・13号住居址	50
第10図 第12・14号住居址	51
第11図 第15・16号住居址・第2・3号土壙	52
第12図 第17・18号住居址・井戸址、第1・4号土壙	53
第13図 第19・20・21号住居址	54
第14図 第1号住居址出土遺物	55
第15図 第1号住居址出土遺物	56
第16図 第1・2号住居址出土遺物	57
第17図 第3・4・5号住居址出土遺物	58
第18図 第6・7・8号住居址出土遺物	59
第19図 第9号住居址出土遺物	60
第20図 第11・12号住居址出土遺物	61
第21図 第12号住居址出土遺物	62
第22図 第12号住居址出土遺物	63
第23図 第13・14号住居址出土遺物	64
第24図 第15・16号住居址出土遺物	65

第25図 第17号住居址出土遺物.....	66
第26図 第18号住居址出土遺物.....	67
第27図 第18・19号住居址出土遺物.....	68
第28図 第20・21号住居址出土遺物.....	69
第29図 井戸址、第2・3号土壙、その他出土遺物.....	70

図 版 目 次

卷頭図版	網代地草鳥鏡	口 絵
第1図版	浅川西条遺跡・神楽橋遺跡遠望、調査地近景	
第2図版	第2~10号住居址	
第3図版	第1・2・3号住居址	
第4図版	第3号住居址カマド、第4号住居址	
第5図版	第4号住居址列石・カマド、第5号住居址	
第6図版	第5号住居址出土陶器、第6・7号住居址	
第7図版	第8号住居址、第9号住居址・カマド	
第8図版	第8・10号住居址カマド、第10号住居址、第5~8号住居址	
第9図版	第11~14号住居址、第11号住居址	
第10図版	第12号住居址・土器出土状態、第15号住居址カマド	
第11図版	第15・17号住居址	
第12図版	第16・18号住居址・第18号住居址土器出土状態	
第13図版	第19~21号住居址、第19号住居址	
第14図版	第20・21号住居址	
第15図版	井戸址、第1号土壤	
第16図版	第2~4号土壤	
第17図版	第1号住居址出土遺物	
第18図版	第1・2号住居址出土遺物	
第19図版	第2・3・8号住居址出土遺物	
第20図版	第9・11・12号住居址出土遺物	
第21図版	第12号住居址出土遺物	
第22図版	第12・14号住居址出土遺物	
第23図版	第15・16号住居址出土遺物	
第24図版	第17号住居址出土遺物	

- 第25図版 第18号住居址出土遺物
- 第26図版 第19・20号住居址出土遺物
- 第27図版 井戸址、第2号土壙、その他の出土遺物
- 第28図版 第2・5・19・21号住居址出土遺物
- 第29図版 分布調査
- 第30図版 スナップ

第1章 長野市浅川西条遺跡分布調査の経過

第1節 分布調査に至る経過

いわゆる善光寺平の集落は犀川・千曲川の沖積地及びそれらに注ぎ込む小河川による扇状地形上に立地している。長野市におけるこれらの地形は、その多くが、市街地・水田として利用されており、その発見は単独あるいは偶然に確認されるのみで、面としての遺跡範囲の把握は不可能に近い。ただ地形と遺物の散布状況から遺跡規模を推定しているにすぎない。

このように、浅川西条遺跡も駒沢川扇状地のいわば扇頂部に位置し、その地目は水田であり、從来は遺跡存在の空白地であった。

この扇状地約10ヘクタールに長野県住宅供給公社による団地造成計画があった。從来水田はその造成時にすでに遺跡が破壊され、遺構・遺物は残らないものと考えられていた。市教委にこの計画がもたらされた時も、早速畦畔等で遺物採集分布調査を実施したのであるが、何らその痕跡を認めることができなかった。しかし大きな面積であり、微地形が複雑であり、他地域の水田地調査例から、一概に遺跡の存在を一蹴することができなかった。そこで市教委は県教委・県住宅供給公社と協議をし、遺跡の存在・範囲等を的確に把握するため、試掘を伴う分布調査を実施することになった。以下日を追ってその経過を略記する。

8月28日 県教委・県住宅供給公社及び市教委により現地において造成事業範囲の確認・調査方法等の協議を行う。

9月10日 県住宅供給公社より分布調査の依頼があり、市教委では県教委及び関係方面と協議を重ねた結果、10月2日より分布調査を実施することに決した。

第2節 分布調査とその結果

1 分 布 調 査

分布調査は、10ヘクタールという広い範囲の中で、効率的かつ地形的に遺跡の存在を確認するにはどのような方法によるかという点にあった。もっともこのような扇状地形上の遺跡における堆積上層の複雑さはすでに経験しているところであり、遺跡立地条件等を鑑み、その条件にかなう地点を地形に沿って、縦方向に調査を実施した。調査地線は駒沢川流域の微高地上に2列及び白山沢による扇状地にかけ山麓部に1列で、各線にバックホー・人力による試掘ピットをあけ、調査にとりかかった。この調査法は弥生時代の遺物包含層とその上面の後出遺構・

遺物および土層を意識してのものであった。

10月2日 現地にて、調査地点・方法等細部に亘る打ち合せを行う。協議の結果、弥生時代生活面、それ以下の層までの確認が必要であると考え、そして水田であるとの考慮のもとにバックホーによる調査を併行することに決した。調査は駒沢川沿いの微高地上をA地点とし、標高にしたがって上から下へ調査を行ない、山麓部及び白山沢扇状地をB地点とし、同方法による調査を実施していくことになった。本日は人力による小ピット3ヶ所をあけて標準土層を確認する。

10月3日 雨のため調査中止し、地形の把握につとめる。

10月4日 バックホーによる調査を実施する。A地区18ピット・B地区5ピットを調査する。ピット間隔は約10mとする。調査は降雨と水田排水のため地下水が浅く調査に困難を極めるも土層実測を行う。下方水田ピットにいくにしたがい遺物は皆無になる。环形土器1点出土。

10月5日 前日に引き続きバックホー・人力による試掘ピット調査を実施する。前日の环形土器出土地は円形の土旗様造構になる模様である。また上方約30m付近に住居址の可能性のある落ち込みを検出した。

10月6日 昨日B地区において調査終了時にバックホーが埋没し、以後の調査を断念し、あとは人力による調査にする。A地区は造構の検出によりすべて人力による調査を行う。蔵骨器と思える壺形土器を検出する。全体に遺物少なし。

10月7日 一昨日検出した住居址様落ち込みの認められた水田付近より他の住居址と思える落ち込みを確認する。それより上部は遺物の出土はみたが、造構の確認には至らなかった。午後よりA地区的バックホーによる試掘ピットの危険性を考え埋め戻し作業を行う。

10月9日 A地区的調査を終了し、B地区白山沢扇状地に調査の主力を移す。遺物は黒灰色粘質土から出土するも、磨耗が著しく量は少ない。B地区的埋め戻し作業と土層実測を行う。

10月10日 前日に続き調査をするも、湧水著しくまた粘質土層であるため調査に困難を極める。包含層は意外に深く、約60cmにも及び、その出土遺物は数点にすぎない。灰色粘質土層の確認を最後に調査を終了する。土層実測。

10月11日 調査器材の撤収を行う。

10月12日～16日 残務整理を行う。

この調査において次の結論を得た。

【基本層序】 上面より水田耕作土・床土・砂利混り黑色砂質土（遺物包含層）・黄褐色砂質土（造構確認層）・黒灰色泥質土・青灰色砂質土・小円礫含砂利各層となり、部分的に砂利を含む。

【遺跡】 A地点からの出土土器は磨耗しているが、出土状態から現位置よりそれ程移動していないと思われ、その出土状態は駒沢川に沿って延びており、これと同様に集落跡が想定されようか。規模は標高にそって縦に延びる比較的大規模になる可能性がある。

〔遺構〕 本調査は思いのままの偶然性ある試掘ピットの調査ともいえるが、次の可能性ある遺構を検出した。住居址・土壙（井戸址）・ピット・溝等がある模様。

〔遺物〕 平安時代に比定される土師器（环形土器・甕形土器）・須恵器（环形土器・甕形土器）・灰陶陶器（碗形陶器・壺形陶器）等出土しているが、全体に出土量は少ない。

2 今後の処置

確認された遺跡を浅川西条遺跡と称し、分布調査結果に基づいて、団地造成事業前に学術調査を実施し、本遺跡を記録として保存する。

3 調査団の編成

調査主体者

花岡直一（長野市教育委員会教育長）

調査団

調査団長

米山一政（日本考古学協会会員・長野市文化財専門委員長）

調査員

小林 幸（同・須坂高）・辻沢浩（同・長野西高）・原田勝美・佐藤慶二・広瀬敏和・山岡栄子・臼田武正・小柳義男・小平和夫（以上長野県考古学会員）宮川信子・小林一夫・大塚尚三・宮地直之（以上信大学生）中村くみ子（日大学生）

協力者

三井 茂・小林丈志・相沢金治・井堀五郎・宮下 武・吉田花枝・丸山 勇・竹内徳幸（以上社会教育課）

事務局

中村邦雄・矢口忠良（社会教育課文化財係）

（事務局）

第2章 長野市浅川西条遺跡発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

分布調査結果を県教委・県住宅供給公社へ報告し、事後の処置を協議する。県住宅供給公社は引き続き速やかに調査されたい旨であったが、この間に浅川神楽橋地籍の分布調査をはじめ諸々の遺跡の調査があつたり、また調査員確保等の問題があり、調査は翌昭和50年にもちこすことになった。この間に関係諸方面の意向を打診しながら、調査の機会をうかがった。

調査は、湧水・雨季等の関係から、昭和50年7月20日より8月13日にかけて、現地における発掘調査を進めることにした。

第2節 事前打合会日誌

6月14日 浅川西条遺跡発掘調査事前打ち合せ会を開催。調査団の編成・調査日程・調査工程等について協議する。

6月17日 県住宅供給公社より本調査の正式依頼があり、調査への準備に着手する。

7月12日 前議にしたがい、調査団会議を開催する。調査方法・役割分担等を検討した。分布調査の結果から水田であるという現状地目を鑑み、遺物包含層直上までの土層（主として水田床土層）を調査前にブルドーザーによって除去することに決定した。

第3節 調査団の編成

調査主体者

中村博二（長野市教育委員会教育長）

調査団

調査団長

米山一政（日本考古学協会員・長野市文化財専門委員長）

調査主任

小林 幸（日本考古学協会員・長野県須坂高校教諭）

調査副主任

小林秀夫（日本考古学協会員・長野市篠ノ井西中学校教諭）

調査員

大久保邦彦（長野県考古学会員・長野建設事務所）・唐木孝雄（同・津和小教論）・鳴海本昭（同・中条小教論）・宮下健司（同・若穂中教論）・小柳義男（同・川上第二小教論）・百瀬新治（同・依田窪南部中教論）・佐藤慶二（同・鳥居農協）・高原英男（同・長野市消防局）・小平和夫（同・信大学生）・一条隆好（同・信大学生）・佐藤信之（同・立正大学生）・片山徹（同・信大学生）・岩佐哲男（信大学生）・宮沢武弘（信大学生）・滝沢公男（長野北部中教論）

調査補助員

宮川信子・飛田和子・西沢賢治・大塚尚三・古屋公男・土屋好幸・塩原章一・小林国雄・伊藤彰・北沢尚之・原田永喜・廣沢武弘・丸山強・亀山政弘（以上信大学生）・中村くみ子（日大）・横山勝之（明大）・上原敬（東京農大）・中村邦雄（長野市）・横山とみ枝・重田睦子（主婦）・宮渕弓子・八町利佳子・田中正江

特別調査員

斎藤豊（信州大学教育学部助教授）

協力者

三井茂・松橋順・相沢金治・宮下武・吉田花枝・丸山勇・宮沢秀幸（以上長野市社会教育課）

事務局

松岡成男（文化財係長）・矢口忠良（文化財担当主事）

第4節 調査日誌

7月15日～20日 ブルドーザーにより、扇頂部より扇尖部にかけて水田耕作土の除去を行う。

7月19日（晴） 表土除去後の遺跡にグリッド配置作業を行う。

7月20日（晴） 本日より発掘調査を開始する。分布調査結果より、重点調査地を認定するため、試掘的グリッドの掘り下げを行う。C地区A～G、18～23のうち17グリッドの調査をする。E・F21・22に住居址らしき落ち込みが見られ、更にその北にも住居址の可能性ある落ち込みが認められた。前者を1号住居址（12号・是正住居番号以下同じ）、後者を2号住居址（14号）とする。

7月21日（晴） 1号住居址（12号）の平面プランの確認を急ぐ。南北辺は南が他の遺構に、北は2号住居址（14号）と重複しているため困難を極めたが、他に比べ新しい時期に構築されたため、隅丸方形プランを確認することができた。C～F19・20、K22・24の調査を行う。遺物少なく、遺構なし。

7月22日（晴） 1号住居址（12号）の掘り下げ。覆土中に完形土器を含む遺物の出土量多

く、また人頭大の石の散在が認められ、特に東壁に集石が認められた。I 20において落ち込みが認められ、ほぼ完形の环形土器2点が検出され、3号住居址(15号)になる模様。明日の調査に期待がもたれる。K・M20・22の調査をするも遺物少なく、遺構なし。

7月23日(晴) 昨日に続き1号住居址(12号)の精査、3号住居址(15号)のプラン確認に全力をあげる。なお3号住居址(15号)上に浅い溝が認められたが、新しいものである。K 24・M22・P・Q 13・14の調査。遺構は認められず。

午後よりCS～Yのグリッドの配置を行う。遺物は比較的少なかったが、3号住居址(15号)上面埋土より完形の和鏡が出土したことが特記される。

7月24日(晴・雷雨) 3号住居址(15号) 東壁の確認と掘り下げ。1号住居址(12号)の精査。S～Xのグリッドの調査。遺構なし。

午後雷雨あり作業を中止し、明日からの調査の打ち合せをする。

7月25日(晴) 1号住居址(12号)、3号住居址(15号)の精査を続ける。P・Q 16で分布調査の際に確認した土壌(井戸址)の確認とP・Q 16・17で椭円形の落ち込みがあり、明日の調査に期待をよせる。

7月26日(晴) 昨日と同様の作業を継続する。土壌(井戸址)を井戸址1とし、椭円形の落ち込みを1号土壌とそれぞれ呼称する。井戸址底部より厚さ2～3cmの木炭・灰・木片が認められた。

本日より扇状地土層確認と遺跡立地の自然的条件を確認するために、斎藤 豊助教授の指導の下に、ハンドオーガーによる地質調査を開始する。この調査は、地質学専攻の信大生を中心としてすすめられる。

3号住居址(15号)カマド部より石棒が出土した。

7月27日(晴) 本日より市内の中小学生が調査に参加し、総勢50余名になる。住居址の精査は昨日に継続す。K 12・L 9・11・13、M 12の調査を行うも遺物少なく、遺構も確認できず。

一部B地区の調査にかかり、V 22・23に落ち込みあり、住居址の可能性あり。更に住居址存在の可能性があるため、周辺全面を広げ、集落的面でそれらを把握する方針を固め順次グリッドの拡張を行った。井戸址1の精査。遺物は、V 23より金粉付着の灰釉輪形陶器片を得た。

7月28日(晴) 連日の猛暑で調査員もバテ気味で、雷雨がほしいところ。住居址の精査及び土壌1の掘り下げと断面土層の確認と実測を行う。H、I、J 11に住居址の可能性ある落ち込みを確認する。

7月29日(晴) 前日期待した住居址はH、I 12、J 13の調査を進める中で堆積土層の微変化によるものと判明し、調査者を落胆させた。1号住居址(12号)の土器・集石地の実測、3号住居址(15号)の覆土断面実測と実測用土手の撤去作業を行う。B地区のU 21・25、V 24・25、W 21・23にかけて3基の住居址が埋蔵されている可能性強まる。

7月30日(晴) B地区グリッドの拡張を続ける。乾燥による包含層の硬化と、酷暑と疲労により調査は当初より進展がゆるくなる。調査は遅々として進ます。

7月31日（晴） 1号住居址（12号）に隣接するE、F19～21に2基の住居址があるもよう。B V22を中心とする4号住居址（3号）周辺の住居址の存在を確認するためグリッドの拡張を進める。

3号住居址（15号）、井戸址1、土壤1の写真撮影を行う。

8月1日（晴） E、F19～21の住居址を南より6号住居址（11号）、7号住居址（13号）としプランの確認を急ぐ。B T21を中心とする8号住居址（1号）は黒土中に構築された可能性があり、カマド付近のみ確認できた。3号住居址（15号）の実測を行う。

8月2日（晴） 初日に発見された2号住居址（14号）のプラン確認と掘り下げ及び4号住居址（3号）、6号住居址（11号）の掘り下げを行う。9号住居址（2号）プラン確認を急ぐが、住居址は思っていたより大きく、ブルドーザーによる耕土の中に埋れているため作業は困難を極める。

8月3日（晴） 2号（14号）、4号（3号）、5号（10号）、6号（11号）、11号（8号）各住居址の掘り下げ及び精査を行う。12号住居址（4号）、14号住居址（6号）のプランの確認を行う。8号住居址（1号）のカマド、遺物出土状態の実測を行う。本日は多数の調査員が参加して、終日活気のある調査が行われた。

8月4日（晴） 昨日に引き続き同様作業を継続す。9号住居址（2号）のプランの検出を続ける。各住居址からの遺物の出土量は比較的少ない。土器の洗滌を始める。

8月5日（晴） 住居址の精査を続ける。本日よりバックホーを発掘現場に導入する。9号住居址（2号）の一部が、発掘調査前に耕土した盛土の下に及んできたことと、住居址群が南方に延びる可能性が出てきて、住居址群は一定の法則性にもとづく集落址となる可能性も出てきたことによる。

集落址の可能性ある以外のA地区より上方をバックホーによりトレッセを5m間隔に8本あけ、生活面の確認を行う。A地区においては表土（耕作土層）下はすぐに砂利層及び黄褐色砂質土層になり、同期の遺構は水田造成時か、駒沢川の洪水による流出のためか、遺物は確認できるのであるが、遺構は検出することができなかった。ただ、すでに破壊されていたという事実のみで、それ以上の理解には及ばなかった。

8月6日（晴後雨） 30°Cの高温が連日続き、粘質土は硬くなり、体躯も汗と砂塵で真黒、そして疲労がかさなりつつあるも、今日は休息できる慈雨が午後より雷をともなって降り出した。

8月7日（雨） 雨天につき作業中止

8月8日（曇） 昨日の降雨は午前には止んだものの、調査地内は全面覆水で、調査が危ぶまれた。排水ポンプ及びバケツによる排水が午前中続けられたが、現調査地内に入ることは不可能であった。これに反し、新たな事態がおこった。それはC地区からD地区に移る範囲に住居址の掘り込み面が確認されたからである。この地域は何度も調査を試みたが、遺構掘り込み面が明らかに全域にわたって露呈しており、遺物もすくなかったため、調査員の視野からは没

していたのである。結局はブルドーザーのキャタピラに付着した土が、全城全面を覆いつくしていったためであった。このことにより、住居址5基と土壤4基を確認した。

8月9日（曇） 昨日の新たな発見により、B地区及びC地区より検出された住居址群の調査とC・D地区的住居址群の調査に全力を上げ検出作業を進める。日射は今日は大変に穏やかで、調査は順調にすすんだ。

8月10日（曇） 時々強い日射を受け暑い。それも蒸風呂の暑さだ。B地区及びC地区より検出された住居址群の調査とC・D地区的住居址群の調査に全力を傾注し検出に努む。B地区9号住居址（2号）、16号住居址（10号）を掘り下げる。10号（5号）・11号（8号）・14号（6号）・15号（9号）の各住居址の精査と写真撮影をする。12号住居址（4号）の壁下にはほぼ同一大の自然石が壁に沿って羅列しており、周溝のあり方に注目される。C・D地区的住居址は、30番代の号数で処理する。

8月11日（晴） C地区において確認した全遺構の精査と写真撮影を行う。B・C地区にヤリ糸を配置し、実測の準備をし、1号住居址（12号）の実測を完了する。

午後3時頃、発掘現場に隣接する西条部落に火災あり、全員調査を中断して消火作業に協力する。各調査員は勇猛果敢に消火に努め大なる感謝を得た。

その後、ヤリ糸の配置を点検して、B・C地区より実測を開始する。

8月12日（晴） B地区15号住居址（9号）、16号住居址（10号）の精査を続行しながらも、調査の主力をD地区に移す。3基の住居址が相互に重複している32号住居址（19号）、33号住居址（20号）、34号住居址（21号）はその関係把握に苦慮した。土壤2～土壤4の調査を実施する。

8月13日（晴） 当初の計画では今日で調査は完了する予定であったが、調査未完了につき、明14日～16日は「盆休み」として、17日より調査を再開することにする。B地区・D地区的写真撮影を実施する。

8月14日～8月16日 盆休みのため作業せず。

8月17日（雨） 雨天のため調査中止。調査処理の打ち合わせ。

8月18日（晴） D地区的精査を完了し、次いで写真撮影をすませる。B地区・C地区的実測すべて完了する。

8月19日（晴） D地区的実測完了。各住居址のカマドの構造などを調査し、断面実測の事後処理を行い、本遺跡の全調査を終了した。発掘現場の清掃、後片付、器材の撤去等をすませ、調査員が現場を離れたのは午後4時30分。真夏の太陽は頭上高く照りつけて、発掘現場は瞬時に静寂をとりもどし、調査員の押す一輪車の乾いた輪立ちの音が聞えるだけである。

第5節 発掘調査参加学校生徒一覧

長野吉田高校 地歴班（27名）

中村 裕（班長）・田中和佳・三石 駿・済藤 剛・川島修一・竹村一男・牧内善一・刺刀 修・沢柳彰彦・川瀬清治・田畠邦博・西沢賢一郎・山本秀一・山平明彦・金井 秀俊・岸田 明彦・小宮山久・青木和朗・鈴木哲夫・滝沢 繁・吉沢一智・宮本伸一・小瀬宏史・宮沢健一・依田武之・塩瀬和也・小林昭俊・鈴木 宏（顧問）・臼井 茂（〃）・西村享広（〃）

長野西高校 地歴部（12名）

山田佳子（部長）・丸山恒子・西沢敦子・赤羽史子・萩原妙子・笠井美江・正木三恵・松橋敏子・柳沢智子・黒岩 操・菊原幸枝・牧村美穂子・東福寺利雄（顧問）

須坂高校 地歴部（17名）

青木和明（部長）・関 賢司・中山政春・若月 稔・山崎幸孝・市村勝巳・塚田摩弥子・宮沢京子・宮本マリ・山岸雅明・吉岡新太郎・清水洋子・小田切徹男・綿田弘実・小出悦子・原田ます恵・湯本好美・小林 孝（顧問）

星代高校（2名）

小玉善和・渡辺 豊

三陽中学校（16名）

西沢純夫・稻垣唯良・池田 剛・横山伸夫・今井裕道・近藤新次・金沢敦志・高山利明・本藤孝行・石川 亘・山口喜代美・鶴野 実・中村幹宏・若狭友子・倉島君江・竹内啓恵・田中敏久（顧問）

篠ノ井西中学校（11名）

松崎 望・田中勇・樋本富士夫・倉田 実・上野敏夫・近藤栄一・大内 剛・徳永信司・斎藤祐二・丸山建司・祖山克彦・小林秀夫（顧問）

東部中学校（12名）

田村繁樹・原 豊・近藤尚義・赤沼賢一・加藤浩亜・村田和彦・赤芝忠義・宮沢浩秋・徳永裕亮・橋戸秀文・長田 茂・松岡宏樹・窪田雅武（顧問）

北部中学校（11名）

池田久恵・新津和子・斎藤智之・吉越康弘・中沢重雄・星野弘明・稻田泰紀・金井英司・池田真一・松沢秀樹・藤沢俊久・滝沢公男（顧問）

信更中学校（16名）

矢島孝二・大沢とく子・柳沢京子・内山恵美子・中沢みな子・市川さつき・市川悦美・高野利子・津田美代子・大矢泰宏・矢島 勉・柴田悦男・新井隆司・小幡英章・牛沢真弓・中沢由代・渡辺千佐（顧問）

若穂中学校（21名）

立石 滌・望月 映・品田昌三・小林洋子・坂口啓子・山崎博正・前角和夫・小森好則・宮下愛彦・伊藤聖二・雪入豊司・宮本康一・高津和実・内山昌彦・岩野貞一・須田悦雄・坂口博之・小宮山茂・小池 弘・上沢修一・藤沢久仁昭・宮下健司（顧問） （事務局）

第3章 長野市浅川西条遺跡周辺の環境

第1節 遺跡の地理的環境

1 自然的環境

浅川西条遺跡は駒沢川が形成する扇状地の扇頂部、川の左岸に位置している。扇状地は谷口の塚田橋付近より、南の浅川および南東の若槻方面に2度の勾配で半円錐形に広がっている。この扇状地堆積層の緩斜面と、北の福岡一西条の山麓は、標高440mで境している。山麓線から白岩付近の標高500mに至る砂岩泥岩層および裾花崗岩よりなる傾斜面は勾配が約7度で耕地となっている。白岩より三登山(923.0m)の尾根(893m地点)に至る裾花崗岩層の斜面は、約15度の急勾配で山林となっている。浅川泥岩層よりなる西麓は耕地と集落が多く、県道二之倉線が南北に走っている。駒沢川扇状地の扇端は、浅川团地南端の次郎堰付近で勾配が1度となり、浅川扇状地のゆるやかな平坦面と重なっている(第3図)。

浅川西条遺跡の近くを流れる駒沢川は、長野市浅川字大沢と字音沢より発し、浅川西条の谷を南々東に向って流下している小河川である。大字坂中の西方、字横手平より押田地蔵の小板屋橋までの勾配は地形図の計測で4度である。流路は谷口の塚田橋より南東に変わり、駒沢川と徳間川の合流地点までは2度の勾配で流下している。これは、浅川東条の谷口より南東に流下する浅川が、浅川橋・西山田橋間1度の勾配であるに比し、やや急である。駒沢川は徳間川との合流地点より下流にある馬屋橋付近より天井川となるが、それより上流はかなり侵食がみられ、西条遺跡付近の河床と右岸との比高は1.9m前後となっている(第4図)。

2 土地利用の変容

駒沢川の谷口より次郎堰に至る浅川地区の扇状地堆積層の平坦部と、浅川泥岩層よりなる山麓部の集落の状況を比較すると、次表のようになる。

昭和30年(1955)現在の平坦部の集落は、扇頂部に押田があり、世帯数の比率は11.1%である。これに扇状地の北側山麓から平坦部にかけて広がる浅川西条を加えても27.3%を占めるにすぎない。平坦部の大部分は水田で、押田・浅川西条の耕作地のほか、福岡・坂中・西平などの出作り耕作が行われていた。昭和28年(1953)現在の浅川村の耕地は332.3反ある。このうち水田は144.3反(水田率43.4%)である。しかし、昭和38年(1963)に浅川团地が造成されると、平坦部の水田の宅地化が急速に進んでくる。そのために駒沢川の右岸は、扇頂部の押田から浅川团地・屋敷田、さらに若槻团地に至るまで、ほとんど住宅地となっている。山麓の浅

浅川地区の山麓部と平坦部の集落の世帯数の比較

	地 区	昭 和 30 年		昭 和 40 年		昭 和 50 年	
		(比率)		(比率)		(比率)	
山 麓 部	東 条	61		73		116	
	何 去	67	210	83	247	119	355
	真 光 寺	32	(72.7%)	37	(45.1%)	65	(30.2%)
	西 平	28		30		31	
	福 囲	22		24		24	
	浅 川 西 条	47	47 (16.2)	46	46 (8.4)	62	62 (5.3)
平 坦 部	押 田	32	32	48	255	86	758
	浅 川 団 地	—	(11.1)	207	(46.5)	521	(64.5)
	神 楽 橋	—		—		26	
	屋 久 田	—		—		125	

（長野市統計書、市勢要覧より作成）

川東条・何去の標高420~500mの斜面も宅地化が進んでいるが、昭和50年（1975）までの10年間に世帯数の比率は平坦部の66.5%に対して山麓部の30.2%と逆転している。

このように、土地利用の変容は耕地の減少と住宅地の増加という形で表われている。昭和25年（1950）より45年（1970）までの20年間に浅川地区で失われた耕地は109.6haとなり、現在水田が残された地籍は浅川西条・神楽橋のみとなっている。そして今日、浅川西条・神楽橋両地籍も宅地化されることになり、浅川西条・神楽橋遺跡とともに、これら緑したたる水田も我々の眼前よりその姿を消し去ろうとしている。（流沢公男）

第2節 遺跡の歴史的環境

浅川西条遺跡周辺は、今度の調査が実施されるまでは、その大部分は水田地帯であったため考古学的遺物の採集はほとんどなされずに現在に至っていることは先述した如くである。ただ、水田の中に点在する西条部落の宅地・屋敷内よりは縄文期の打製石斧、石鎚がたまたま採集されるという程度で、この駒沢川の両岸に広がる水田一帯は、よしんば人間の生活の痕跡を追いかけるよりも、その時間的位置づけすら困難の状態であった。

現在、明らかにされている遺跡・遺物の散布地域も遺跡北方向に連なる山々の山麓部に及んで絶えてしまい、遺跡西方向の蕪谷地籍、南方向に流れる浅川の河沿いまで、ほとんど遺跡らしいものは確認されずに現在に至っている。また確認されている遺跡の大部分は古墳であり、浅川の両岸周辺に及んで、弥生・古墳時代の住居址、遺物が確認されるため、人間の生活の開始時期はいづれにしろ、弥生時代以降に活発になった地域と考えられる。浅川西条遺跡発掘前の分布調査により確認された「神楽橋遺跡」は、弥生時代以降、この駒沢・浅川の両河川に生産の主要な条件を見出した農業の開始期にさかのぼることも考えられる。この「神楽橋遺跡」

と「浅川西条遺跡」は、その意味においても、従来の歴史不毛の地域という理解を一転させる。人間と住居とそれを支えたバック・マシンをそれぞれ有機的に考察、理解する有力な歴史地帯として蘇生したと言っても過言ではなかろう。しかし、この研究もようやくその途についたところである。

さて、この浅川西条遺跡一帯が、歴史の上で明確な姿を見せてくるのは、平安時代末期頃からである。故栗巖英治の研究になる「信濃莊園の研究」によれば、平安最末期頃、中央政界に君臨した後白河法皇の時代より、文治年間、応仁年間、天正年間と「証菩提院領若月庄」として歴史にその名を止どめ、栄古盛衰の歴史を繰り返してきていることである。現在でも、莊園支配者（現在に至るもその系譜不詳）の居館址は残っており、その堀は一面に深い水をたたえている。

「証菩提院領若月庄」の歴史は、現在のところ先述の栗巖英治の研究成果の域を十分に克服しておらないために、その発生・成長・消滅の過程は定かではないが、浅川西条遺跡は、考古学的研究と文献学的研究の両者の提携の中で、「若月庄」の実態を強く追求できる可能性を秘めておると考える。

浅川西条遺跡は、それ自体は「独立」した遺跡として扱ってはいるが、「神楽橋遺跡」及び、浅川流域の諸遺跡と共に総合的な理解を目指すことにより、弥生時代・古墳時代・律令時代、そして平安時代から中世に及ぶ、生産活動の変遷、ひいては、平安時代頃より活発化してきた地域莊園開発とその再編成という歴史のダイナミズムを得て感得できる絶好の歴史環境にあるということができる。（小林　孚）

第4章 遺構と遺物

遺構は住居址21ヶ所・井戸址1ヶ所・土壤4ヶ所及び溝址を検出した。ことに住居址は掘り込み土層及び群集により、標高に沿って上部（1～10号住居址）・中部（11～15号）・下部（16～21号）に大別することができる。時期は平安時代末葉に位置づけられようが、遺物として該期遺物はもちろんであり、それ以降の青磁陶器の出土に至っては、中世的性格が強くなるのである。遺構ではそれに属するものがなかった。

第1節 住居址

1 第1号住居址

遺構（6図1・3図版4） 2号住居址覆土上面に構築された住居址で、黒褐色粘質土層を掘り込んだ窪穴住居址である。水田造成時に削平を受けており、プラン・規模等を把握できなかつたが、標高の低いカマド及び貯蔵穴のみ検出することができた。床面は出土遺物状態から確認したのであるが、西から東に傾斜し、軟弱である。カマドは両袖に入頭大的河原石を立てて構築されており、周辺及び貯蔵穴に石材の散布がみられた。貯蔵穴はカマド左側に隣接し、東西に長い隅丸の三角形形状を呈し、長軸85cm・短軸65cm・深さ18cmを測る。遺物の出土範囲は東西3.0m・南北2.4m以内にあり、特に貯蔵穴内外に多く認められた。

遺物（14・15図、16図1、17図版、18図版16～28） 本住居址の出土遺物は2号住居址のものとの混乱を防ぐため、完形及びそれに近いものを抽出した。出土状態は土師器壊形土器はほぼ正位での出土を示したもののが多かった。調査時に番号を付したものは40番に達した。このうち、台付皿形土器2点・壊形土器35点・壊形土器5点に分類でき、総計42点を数える。台付皿形土器は内外面ともいわゆるヨコミガヤが施され、内外面ともに黒色処理される。また壊形土器にも内面黒色処理された所謂内黒の土器19点あり、処理されないものとの個体数の差は殆んどない。内黒の土器3点に放射状の暗文が付され、15図23には内面を6区分した本数の少ないものがある。壊形土器は小形のもの1点を除き他は比較的大形の壊で、体部破片は少なく、図示した範囲内がそのすべてである。壊形土器に比べ、破片量はほんの少量にすぎない。（片山徹・矢口忠良）

2 第2号住居址

遺構（6図2、3図版5） 本住居址は確認遺構の最も西方に位置し、覆土上面に1号住居

址が来る。プランは隅丸方形を呈し、主軸方向はN79°Eを指し、規模は主軸5.35m × 短軸5.15mを測る。黄色砂質土層を掘り込み住居を構築し、壁は直に近く保存は良い。西壁は地形に沿って高く32cm、東壁は18cmを測る。床面は平坦で、良く踏み固められている。柱穴は全くない。カマドは東壁中央部に設けられ、両袖に人頭大の立石を使用し、他の石材はカマド前に散在していた。火床は15cm掘り窪められる。他の内部施設として西壁中央が25cm程張り出しており、この部位の壁は傾斜する。入口部と思われる。覆土全体に人頭大から拳大の跡が散在しており、廃絶後意識的に投げ込まれた可能性がある。ただ北東壁隅付近に拳大疊の集石が床面に密着した状態で検出され、住居址利用時の所産であると考えられるが、性格は不明である。

遺物（16図2～11、18図版29、19図版30・31、28図版113）住居址の規模に比べ、出土量は少ないが、土師器・須恵器片がカマド周辺より出土している。土師器は壺形土器が多いのであるが、図示できるものはない。ただ2は覆土上面の出土であり、本住居址に付属する可能性は薄い。壺形土器に4形態あり、4は小形で頸部は屈曲し、体部中位で最大径になる。6は4に似るが大形で、5は中形の甕で、頸部の屈曲は少なく、体部内外面に櫛状工具による整形痕跡を残す。特に外面は同手法による縦・横の調整により、意識的に文様効果をだしているようである。7は最大径が口唇部にあり、口縁部は体部より直接外開する。体部は円筒形を呈し、ヘラケヅリで整形される。9・10は体部下半の破片である。須恵器は覆土より壺形土器片が、床面より蓋形土器及び小形壺形土器頸部下が出土している。（片山徹・矢口忠良）

3 第3号住居址

遺構（7図1、3図版6、4図版7）2号住居址東側に位置し、4号住居址を切り込み、煙道は6号住居址に達しており、4・6号住居址より新しい住居址である。黒褐色粘質土層を掘り込み、床面は黄色砂質土層になる。プランは隅丸不整方形で、主軸方向はほぼ南北にあり、規模は主軸5.75m × 短軸4.30mで、壁はいくぶん傾斜するが、良好である。北壁30cm・南壁26cm・西壁30cmを測る。床面は平坦で良好であり、4号住居址との床面高差は10cmである。カマドは北壁中央に位置し、火床は長軸に1.40mあり、14cm掘り窪められ、幅12cm・長さ36cmの丸底の煙道が付く。また火床の北よりに2個の立石を利用した高さ20cmの支柱が設置されていた。カマド東側に隣接して、長軸130cm・短軸96cm・深さ60cmの丸底の不整構造形の貯蔵穴があり、内部にカマド石材及び、壺形土器の落ち込みがみられた。柱穴をはじめ他の内部施設はない。

遺物（17図1～12、19図版32～34）本住居址の出土量は比較的少ないが、土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。土師器が圧倒的な量を占め、他は数点出土しているのみである。土師器の器種別では壺形土器（1～9）が目立ち、床面からの出土のものは内面黒色処理されたものが多い（3～9）。出土地点はカマド周辺及び西壁沿いに多く認められ、その状態はほとんどが正位にちかかった。須恵器は壺形土器片で、覆土中よりの出土であり、本住居址に直接付属するかは不明である。灰釉陶器は碗形陶器片である。（矢口忠良）

4 第4号住居址

遺構（7図1、4図版8・9、5図版10～11） 3号住居址により北西部4分の1ほど破壊される。掘り込み土層は3号住居址と同様である。プランは隅丸方形を呈し、主軸方向はN 80° Eを指し、主軸4.60m × 南北軸4.70m のやや主軸の短かい住居址である。壁は直に近く、西壁24cm・東壁10cmを測る。床面は地形に沿って東に傾斜するが、平坦で比較的良好である。カマドは東壁中央に構築され、規模は奥行50cm、袖間24cmと小規模なものであり、奥に10cm程穿った袋状になる形態となる。火床は二次にわたって改築され、一次のものは深く20cmを測り、二次は8cmそれぞれ掘り窪められ、焼土を残す。柱穴は全く認められないが、西・南壁直下に周溝があり、周溝中に長方形に近い河原石が同一レベルに整然と並べられていた。

遺物（17図13） 本住居址からの出土量は少なく、出土遺物の全てが破片であって、図示できるものは灰釉椀形陶器底部のみである。この他覆土中より須恵器變形土器片が出土している。（矢口忠良）

5 第5号住居址

遺構（8図、6図版14） 6号住居址に重複された様な状態で構築された住居址である。6号住居址の床面を掘り込み、6号住居址東壁を越えて設置された住居址である。本集落址中では、最も規模の小さい住居址で、主軸はほぼ東西にあり、2.7mを測る。床面は良好であり、壁の浅い状況で検出されている。カマドは西方中央部に設置されている。

遺物（17図14～15、6図版13、28図版114） 第5号住居址以下第8号住居址までは、複雑に重り合っているため、明らかに各住居址に付属するものを主として図示した。

本住居址の出土量は少ない。土師器が多く、須恵器・灰釉陶器は少ない。図示したものの他、土師器・須恵器變形土器体部片及び灰釉陶器瓶底部が出土しているのみである。また内面に金粉が付着している灰釉陶器・椀形土器底部が出土したグリットは本住居址にあたるが、住居址との関係は不明である。（小林 幸・矢口忠良）

6 第6号住居址

遺構（8図、6図版14） 本住居址は第5号住居址より古く、7・8号住より新しくそれぞれの住居址覆土中に構築されており、床面は黄褐色粘質土を混入した貼り床になる。住居址の主軸はN 83° Eにあり、プランは隅丸方形になると思われ、主軸3.65m × 南北軸4.20mを測る。壁は西・南にそれぞれわずかに残存する程度であった。柱穴はなかった。

遺物（18図1～4） 本住居址の出土量は少ない。土師器変形土器が多く、内面黒色処理されたものは比較的少ない。他に灰釉椀形陶器片が出土している。（矢口忠良）

7 第7号住居址

遺構（8図、7図版15） 6号住居址により南・東壁の一部が破壊される。プランは隅丸方形で主軸方向はN70°Eを指し、規模は主軸4.3m×短軸4.1mを測る。茶褐色粘質土層を掘り込み、壁高は17cmである。カマドは東壁中央付近にあり、検出時には破壊されて、支柱石らしきものと焼土のみ存在していた。柱穴は南・東壁にそって、ともに8号住居址の壁を掘り込んだもの2個を検出したが位置的に主柱穴ではなかろう。

遺物（18図5・6） 本住居址の出土量は少ないが、土師器壺形土器の個体数が多い。5は外面黒色で、ていねいなミガキ整形される。6は灰釉壺形土器で高台が付くであろう。他に土師器壺形土器片が若干出土している。（小林 幸）

8 第8号住居址

遺構（8図、7図版16、8図版） 一群の住居址の中では最もプリミティな状況を残している住居址で、最も古い時期に構築されたものである。プランは主軸3.5m×南北軸5.0mの南北軸が長い隅九長方形といえよう。主軸方向はN22°Wを指す。カマドは北壁の東よりに偏しており、火床主軸70cm、焚口70cmを測り、両袖は石を芯とした石組粘土製カマドの形態になる。内部に壺形土器片が火床上に残存していた。柱穴は西壁各コーナー付近及び南壁下西よりから検出されたが、東側はなかった。

遺物（18図7～11、19図版35） 本住居址の出土量も少ない。土師器のみで、壺形土器が目立つが、そのほとんどが図示したとおりの小破片である。9の壺形土器はカマド内からの出土である。口縁部に最大径がある鳥帽子形態になる。10の体部は筒形を呈する。（小林 幸）

9 第9号住居址

遺構（7図2、7図版17・18） 8号住居址が西に接するほぼ完形の住居址である。プランは方形であるが、東壁は丸味をもつ。規模は主軸2.8m×東西軸3.6mを測る。主軸方向はN23°Wである。壁は軟弱気味で、直に20cm前後落ち込んでいる。床面は平坦で良好である。カマドは北壁中央に位置し、規模は焚口から煙道部まで80cm、両袖幅約80cmで、火床は舟底状に窪む。両袖部に20cm大の河原石を1つづつ、中央部にも1つおいている。またカマドは北壁の内側への最弯曲部につくられているため、屋外に張り出して構築される珍らしい手法のものである。柱穴は認められないが北壁下の一部から西壁にかけ、また南壁下中央付近に周溝が認められた。

遺物（19図、20図版36・37） 本住居址の出土量は少ない。すべて土師器で、壺形土器が比較的多く出土している。小形の薬壺形土器（2・3）は口縁部に最大径があり、体部が鳥帽子形を呈するもの（4）があり、4と同形態で中形のもの（5～7、9・11）及び大形のもの（8・10・12）等がある。ことに12は口径は32cmを測る大形壺形土器である。壺形土器は数が

少なく小破片である。（小林秀夫）

10 第10号住居址

遺構（9図1、8図版20・21） 4号住居址の東側・9号住居址の南側に位置し、独立している。掘り込み上層は3号住居址と同じ。プランは不整形な隅丸方形を示し、主軸方向は南北で、主軸3.0m×短軸2.2mの比較的小さな住居址である。壁高は北壁が最も高く30cmで、南側に移るにしたがい浅くなり南壁は12cmを測り、いずれも垂直で堅緻である。床面は平坦でよくしまっているが、柱穴は認められない。カマドは北壁の東側隅寄りにあり、調査時にはつぶれていたが、原形はよく保たれていた。カマドのセクションを切ると天井の粘土が落ち込み、炊口部と煙道部には赤褐色の土層が入っていた。また壁外西・北に径20~30cm・深さ30cm前後の小ビットが5個検出されたが、本住居址との関係はないものと思われる。

遺物 本住居址の出土量は少なく、床面より土師器甕形上器片5点・カマド内から土師器坏形土器小片が2点出土したのみである。（宮下健司）

11 第11号住居址

遺構（9図2、9図版24） 中部住居址群の最も南に位置し、13号住居址の南西一部を切り込んで構築される。プランは方形を呈し、主軸は東西方向にあり、3.5m×短軸3.4mの規模の住居址である。確認面は地形に沿って傾斜しており、西壁30cm・東壁20cmの掘り込みをみる。床面は南半分はよく踏み固められているが、北側は軟弱で、直上に藁灰状の炭層が一部にみられた。柱穴と思われるビットは西・南の壁外と住居址内南東の隅で確認したが、ともに主柱穴とはなり得ない。カマドの存在痕跡は認められなかった。遺物は覆土5層のうち、第Ⅲ層（赤褐色粘土層）と床面直上より出土した。

遺物（20図1~10、20図版38~40） 本住居址の出土量は少ない。土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。土師器・坏形上器が多く、その中でも内面黒色処理されたものが多い。灰釉陶器は台付皿形上器・椀形上器及び瓶子片が出土している。須恵器は坏形土器・甕形土器片があるが、覆土からの出土であり、本住居址に位置づくかは、不明である。また台付甕形土器（9）の外面底には焼成後、不明の刻文を残す。（小平和夫）

12 第12号住居址

遺構（10図、9図版23、10図版25・26） 中部住居址群の中位に位置し、13・14号住居址を切り込み、砂利混り黒褐色砂質土を掘り込んで構築された住居址である。プランはほぼ南北方向にあり規模は主軸4.6m×東西軸4.65mを測る。壁はいく分傾斜するが良好であり、南壁46cm・西壁34cm・東壁20cmを計り比較的深い堅穴住居址である。床面は中央でいく分窪むが相対的にみると平坦であるが床面の状態は良くない。柱穴らしきものは不規則な20cm内外のビット4個が確認されたが、位置等において主柱穴にはなり得ない。支柱穴であろう。カマドは南壁

に設けられたと思われ、火床のみ残存するが、北壁中央よりやや東に焼痕があり、住居址期間利用においての差であろうか。貯蔵穴と思われるものは西壁隅の不整椭円形（深さ16cm）・南壁東より方形のもの（深さ20cm）・東北壁隅に不整椭円形（深さ20cm）の3ヶ所ある。また東壁北側中央よりの床面上20cm付近から壁上面にかけ小円窓の集石があった。覆土中であるので本住居址との関係及び性格は不明である。

遺物（20図11～18, 21図22図版, 20図版41～49, 21図版, 22図版61～63） 本住居址の出土量は非常に多く、他住居址のものより3倍以上ある。覆土及び床面からの出土は住居址全体に認められ、特に集中して壺形土器が方形ピット中にあった。この他土師器は床面及びその直上に完形に近い壺形土器が多く出土したが、破片は覆土中より多く出土している。須恵器の出土量は少なく、覆土中より壺形土器体部破片が数点出土したにすぎない。床面より半完形のヘラオコシ手法をもつ壺形土器が出土している。伝世品であろうか。灰釉陶器の出土量は他の住居址よりも多く、器種別では台付皿形土器（含輪花皿3点）・台付椀形土器・長頸瓶等がある。また他の住居址に認められなかった土師器口鉢が3個体分、そして砥石・土製紡錘車が覆土より出土し、この他に角釘状の鉄製品が出土しているが、腐食が著しい。（一条隆好・矢口忠良）

13 第13号住居址

遺構（9図2, 9図版23） 南北の両辺をそれぞれ11号・12号住により切り込まれた隅丸方形のプランを呈する住居址である。砂利混り黒褐色砂質土層から掘り込まれて構築されたもので、主軸はほぼ南北を指し、主軸4.4m×短軸4.3mの規模を有する。地形に沿って西壁が高く18cm・東壁は12cmを測る。床面は南から北へ傾斜しており、全体に軟弱である。北西・北東隅に支柱穴と思われる深さ10cmの小ピットがある。また南東隅付近にカマドの火床と思われる径30cm幅の焼土を検出し、左側に石材と思われる跡が散在していた他カマドの痕跡はない。

遺物（23図1～4） 本住居址の出土量は少なく、すべて破片の土師器と灰釉陶器であり、完形品の出土はなかった。土師器壺形土器は浅い椀形を示すものが多く、また黒色処理されたものが多い。大形の壺形土器の体部下半は叩き整形が施される。灰釉陶器は台付椀形土器と瓶子片が出土している。（小平和夫・矢口忠良）

14 第14号住居址

遺構（10図, 9図版23） 中部住居址群の最北に位置し、南壁付近は12号住居址により破壊される。住居址は砂利層を掘り込んで構築され、一辺4.5mのほぼ方形のプランになると思われる。主軸方向はN5°Eである。壁は直に掘られ、壁高は西で40cmあり、東にしたがって漸減し、東壁では20cmになる。床面は西半分は良く、東側は軟弱である。カマドは北壁に構築された可能性が強く、北壁西隅に長軸1.5m・深さ40cmの不整円形の貯蔵穴があり、内部から壺形土器、木炭、焼土等が検出された。柱穴は認められなかった。

遺物（23図5～12, 22図版64） 本住居址からの出土量は少ないが、土師器・須恵器・灰釉

陶器・綠釉陶器が出土している。11は体部下半の一部を欠くが、口縁部から底部まであり、本遺跡唯一の全体を知り得る大形の變形土器である。須恵器壺形土器（10）は覆土からの出土である。他に變形土器片がある。綠釉陶器は3点出土しており、色調は深緑色で、胎土は灰白色を呈し堅緻である。（鳴海本昭）

15 第15号住居址

遺構（11図1、10図版27、11図版28） 中部住居址群の最も東に独立して検出された。プランは各辺とも丸味を帯び、隅丸方形住居址である。主軸はほぼ東西にあり、規模は主軸5.0m×南北軸5.1mを測り、壁高は西で32cmを最高に、東に向かって漸減する。ただ東壁は水田の造成により破壊されており、現高6cmを測るのみである。床面は平坦であるが軟弱である。カマドは南東隅に設けられており、調査時には破壊を受けており、カマド構築石材・焼土等が散在していた。この中に石棒が1個遺棄されており、その出土状態は南壁下の焼土上に横倒しになっていた。再利用のおもむきがあった。柱穴はカマド付近を除き各隅付近に認められ、径20cm・深さ15~20cmを測る。他に住居中央にはほぼ東西に並ぶ5ヶの不整円形ピットがある。

遺物（24図1~10、23図版65~68） 本住居址の出土量も少ない。土師器が圧倒的量を占め、須恵器變形土器片・灰釉陶器が若干混入する程度である。出土地はカマド周辺に多く認められた。この他特記すべきことに確認覆土最上層より和鏡が出土したことであるが、はたして出土状態より本住居址に積極的に結びつくものかは不明である。また石棒の出土も注意を要し、焼けを受けた様子はなく石棒再利用の可能性がある。（佐藤信之・矢口忠良）

16 第16号住居址

遺構（11図2、12図版30） 下部住居址群の上位最南に位置する。水田造成時に南・西及び東壁の一部が破壊されていたが、北壁・西壁からして隅丸方形の住居址が想定される。西壁高は溝の構築により北壁よりやや深く21cmを測る。床面は平坦で軟弱である。柱穴・カマドは不明である。

遺物（24図11~15、23図版69・70） 本住居址の出土量は少ない。覆土上面より須恵器蓋形土器が、土師器壺形土器・鍔釜形土器・變形土器片は床面から出土した。變形土器は体部に叩き目を残す。（宮下健司）

17 第17号住居址

遺構（12図2、11図版29） 下部住居址群の最西に位置し、黄色砂質土層中に構築された住居址で、プランは主軸がほぼ南北を指し、主軸5.65m×短軸4.80mを測る胴張りの隅丸方形を呈する。確認面より床面の壁高は浅く、東壁25cm・南壁では3cmを測るにすぎない。水田造成時に削平されたためかもしれない。床面は平坦で軟弱であるが、西壁下に南北3.40m・東西1.10mの範囲に貼り床がみられ、他の床面より平均5cm程高い。柱穴は南西隅・住居址中央付

近・カマド周辺に計4箇所確認され、前者の2個は径45cmの掘り方と中に径15cmの柱痕であろうと思われるピットがある。カマドは南東壁間にあり、調査時にはすでに破壊を受けており、周辺に構築材料の角礫が散在し、広範囲に灰の授散部がみられた。灰の授散部は僅かに窪み、燃焼部は深さ12cmを測り、ピット状になる。

遺物（25図、24図版） 本住居址の遺物量は比較的少ない。土師器のみ出土しており、坏形土器（1～4）、錫釜形土器（5～7）、甕形土器片があり、総体に坏形土器が目立つ。坏形土器は壁に沿って、錫釜形土器は住居址全体に散布していた。尚本住居址覆土中から腐食が著しいが、絶型元宝と判読される古銭が出土したことは注目される。（矢口忠良）

18 第18号住居址

遺構（12図1、12図版31、32） 遺跡の南端で、南東に緩く傾斜する斜面に構築された住居址で、黄色砂質土層を掘り込んでいる。プランは主軸が東西にあり、主軸3.7m×南北軸3.9mを測る隅丸方形のプランである。壁は地形により、北・西壁が高く15cmを測る。床面は平坦で堅硬である。カマド・柱穴等の住居址付属施設は検出されなかった。遺物は壁よりも多いが、床面全体に散布していた。

遺物（26図、27図1～8、25図版） 本住居址出土の遺物は比較的多く、土師器のみの出土である。特に坏形土器の出土が目立った。坏形土器で示せるものは29点あり、うち内面黒色処理されたものが10点・両面黒色のもの1点あり、そのうち放射状暗文が付されているものが4点、更に高台が付くもの7点ある。甕形土器は小形のもの2点・大形のもの1点あり、その破片数は少ない。（小平和夫）

19 第19号住居址

遺構（13図、13図版33） 遺跡東端に位置し、21号住居址を切り込んで構築された住居址で、主軸はほぼ南北を指し、主軸4.8m×短軸4.3mの隅が直角に近い隅丸方形を呈する。壁は地形の傾斜から西で高く17cm、東で低く9cmを測る。床面は平坦で軟弱である。柱穴はなかった。カマドは住居址南東壁間に、やや南につき出して設けられている。すでに破壊され、その構造は不明であるが、周辺にかなり多くの礫が残存していた。南西壁間に60cm×40cmの梢円形をした深さ15cmのピットが2個あり、覆土に河原石が集中していた。貯蔵穴と考えられる。

遺物（27図9～17、26図版86～88、28図版115・116） 本住居址からの出土遺物は比較的少ない。土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。土師器は皿形土器・坏形土器・甕形土器があり、坏形土器が目立つ。須恵器は2点出土しており、9はヘラオコシ手法を有し、10は楕形の低い高台を付す坏形土器で、地蒸生産品でなく、移入品であろう。灰釉陶器は少ないが皿形・段皿形陶器が出土している。（唐木孝雄・矢口忠良）

20 第20号住居址

遺構（13図、14図版35） 19号住居址の東側に位置し、21号住居址の北東隅を破壊してつくられる。掘り込み土層は黄色砂質土である。プランは隅の丸味が少ない隅丸方形を呈し、主軸方向はほぼ南北を指し、主軸 $5.8m \times$ 短軸 $4.6m$ を測る。床面は砂質土で堅く、緩やかな凹凸がみられた。南側半分にカヤに似た植物の灰が薄く分布していた。床に敷かれていたものであろう。柱穴はなかった。カマドは南東壁間に設けられるが、すでに破壊されており、周辺に石材が認められた。

遺物（28図1～26、26図版89～102） 本住居址の出土遺物は比較的多く、土師器・灰釉陶器・綠釉陶器が出土している。土師器が圧倒的に多く、所謂カワラケ様小皿形土器11点・杯形土器12点あり、杯形土器には内面黒色処理されたもの6点。このうち放射状暗文を有するもの1点、高台を付されたもの3点ある。變形土器はすべて破片で、その量は極少である。灰釉陶器はすべて椀形で、数点出土しているにすぎない。綠釉陶器は図示した1点出土したのみである。（唐木孝雄・矢口忠良）

21 第21号住居址

遺構（13図、14図版36） 19号・20号住居址の中間の南側に位置し、両住居址に一部を切り込まれている。プランは隅丸方形を呈し、主軸はS 25° Eを指し、主軸 $4.2m \times$ 短軸 $3.8m$ の比較的小形の住居址である。壁高は各壁とも8cm以下で、掘り込みの浅い住居址である。床面は軟弱である。柱穴はなかった。カマドは南西隅に構築されているが、調査時にはすでに破壊されていた。

遺物（28図27～30、28図版117・118） 本住居址の出土量は少ない。遺物は土師器と灰釉陶器で、灰釉陶器は完形の段皿形陶器で1点出土しているのみである。土師器變形土器片は数点にすぎない。（唐木孝雄・矢口忠良）

第2節 井 戸 址

遺構（12図3、15図版37） 住居址群のはば中央のやや北側に位置し、砂利混り黒褐色土層を掘り込んでおり、平面プランは長軸を東西にとる不整橢円形であるが、南東部はやせる。長軸 $1.75m \times$ 短軸 $1.15m$ の規模で、井戸本体は径 $1.1m$ の不整円形を呈し、深さ $80cm$ を測る東側の出張りは汲用の為の段状施設か、確認面より $24cm$ 低い。

遺物（29図2、27図版111） 分布調査の際検出した完形の杯形土器及び本調査での土師器・杯形土器・變形土器片の他、木炭片が出土している。（片山 徹）

第3節 土 墳

1 第1号土塚

遺構（12図3、15回版38） 井戸址の北側60cmで隣接し、プランは小判形を呈し、主軸3.0m×短軸2.2mで深さ36cmを測る。北東にかたよった丸底の土壙で、底面は砂利層になる。遺構内南に大疊の集石が認められた。性格は不明である。

遺物 覆土中に土師器壺形土器片が、また割板状木片が出土した。（片山 敏）

2 第2号土塚

遺構（11図3、16回版39） 本址は16号住居址の床面を掘り込んでつくられており、16号住居址より新しい。プランは不整橢円形を呈し、長軸1.8m×短軸1.6mを測る。壁はなだらかで、西壁近くは18cm・東壁は6cmになる。床面はほぼ平坦であるが、東から西に傾斜する。覆土には比較的多量の木炭・焼土が混入しており、南壁近くには大きな疊が、北壁下に偏平に近い角疊の集石が認められた。

遺物（29図3～10、27回版103～109） 床面及び床面上10cm前後の覆土中より土師器台付盤形土器3点、壺形土器4点、小形手捏形土器1点が出土した。小形手捏形土器・小形手捏形土器の本遺跡において住居址からの出土例がなく、遺構とともに特殊な使用が考えられる。この他に須恵器壺形土器の体部片が出土している。（宮下健司）

3 第3号土塚

遺構（11図3、16回版40） 17号住居址の東側に位置する。プランは不整の橢円形に近いが、西壁は直で、北・南壁は張り出す。長軸は南北にあり、長軸2.8m×短軸2.35mを測り、深さは20cmである。床面は平坦である。床面上に7個の疊が散在している。

遺物（29図11） すべて覆土中からの破片出土であり、その量は少ない。土師器壺形土器・壺形土器片のみである。（岩佐哲夫）

4 第4号土塚

遺構（12図1、16回版41） 18号住居址の西側1.1mのところにあり、主軸方向をN30°Wを指す円形に近い不整橢円形を呈するプランになる。主軸1.1m×短軸0.85mで、深さ24cmを測る。覆土に人頭大の円疊が混じる。

遺物 土師器壺形土器が3点出土したのみである。（矢口忠良）

第4節 溝 址

遺構 12号住居址から15号住居址にかけ、覆土上部の黒褐色砂利層中にある。幅は平均30cm・深さ4cmで、流路は等高線にたいし直交する。住居址よりも新しく、自然的である。

遺物 周辺より古瀬戸瓶子片が出土したのみである。（小林 幸）

第5節 その他の遺物

（29図1・12・13、27図版110・112）

遺構外からの出土量はそれ程多くない。遺構年代と同時代のものがそのほとんどである。土師器が多く、須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器はわずかである。この時期以降のものに1の瓦質土器があり、青磁陶器・古瀬戸灰釉瓶子片が数点出土している。1は分布調査の際水田床下より径40cm・深さ35cmのピット中から正位で出土したもので、蔵骨器を思わせる（29図版122）。この他中世の遺物が出土しているわりには遺構の存在がなかった。（矢口忠良）

第5章 浅川西条遺跡について

立地 山付けに近い扇頂部に位置し、そこには約5kmの間隔で扇状地を構成した小河川が流下する。本遺跡に関与するものには駒沢川と白山沢が大きな作用を及ぼしていることは先に述べたとおりである。これらの河川は護岸工事が進み、上流に砂防堤がつくられ、近頃では鉄砲水による被害はほとんどないが、古の話では、昭和年代に入りても、水田・畑はもとより、微高地にある家屋にまで溢水があったという程の荒れ川である。このような洪水により形成された扇状地は、地盤が砂利層・砂質土層になるのが普通であり、土壤的には肥沃な土が堆積されそうだが、水持ちが悪く、水田耕作に向いていない。また一段高い微高地まで溢水がおおい、この地に集落が営まれたことさえ想定できなかったが、分布調査により遺物の散布が認められ、遺跡が確認された。遺跡上方部は開発によるものよりもこの洪水により洗われたものか、遺物包含層はもとより、遺構面さえ深く削られており、少量の遺物は採集できたが、遺構は認められなかった。遺物出土範囲は3haと大規模なものであったが、調査を終え前述の諸条件により、今回調査した駒沢川に沿った、川に対して自然堤防上、地形的には旧流路で形成され、他よりいくぶん高い微高地上に集落が構成している。検出された遺構確認面は緩く傾斜する地形のいくぶん平坦になる部位にあたり、調査前の水田面積・幅は上部に比べ大きくなることと一致している。また分布調査の結果によると、この微高地より離れ旧流路と思われるところ（南北微高地下）から出土する遺物は微高地上のものに比べ、二次堆積による磨滅が著しく、出土量は激減することからも裏付けられるところである。遺構確認地の微地形は、微高地の南傾斜したその部位に集落が構えられる。また山麓部の白山沢の押し出しによる扇状地にも少量の遺物が散見されたが、それは小片で、磨滅して、二次的な堆積が考えられる。やはり山付部に集落の可能性があり、それは小集落であり、白山沢の押し出し堆積を考えると恒常的なものでなく、短期間一時的なものと考えられる。このような扇状地形に存する集落は、その構成した河川に存否がかかってい、そしてそれが形成した微高地上に営まれるのであるが、裏を返せば水田可能地を求める集落構成員の涙ぐましい程の努力をみるのである。この傾向は人口の増加はもとより、過酷な権力者による収奪を意味しているように思え、平安時代頃より活発化し、莊園開発と再編成のはげしさが伺がえるのである。ただこの扇状地上端部で弥生中期の遺跡が確認されているが、その後当期になるまでその痕跡をみない。

遺構 本遺跡の検出された遺構は前述したところであり、ここではその大略を記したい。遺跡上部の黒褐色粘質土及びその下層の黄色砂質土を掘り込んで構築された住居址群(1~10号)・中部の砂利混じり黒褐色を主として掘り込んだ住居址群(11~15号)及び下部に位置し、黄色砂質土層を掘り込んで構築された住居址群(16~21号)に大別できる。住居址構築面は相当重要視

されていたと思え、砂利混入層を避け、ほとんどの住居址は砂利の減少地・粘質土層・砂質土層中にある。明らかに砂利混入層に構築されたものは14号のみである。ちなみに9号・12号・15号の北側は疊混り砂利層になる。上・中部の造構は重複関係にあるものが多く、集落あるいは住居址立地の条件が良かったものと思える。遺構確認面の黒褐色粘質土層にその縫がありそうであるが、その好条件は何にあるかは不明である。住居址の規模は2号住居址の主軸5.35m × 短軸5.15mを最大とし、5号住居址の主軸2.7m × 短軸2.7mを最少とする。全体の規模は小形化しているが、その偏差は大きく、わずかに一辺4.5m付近に標準が認められる。プランは主軸方向に長い隅丸方形を基本としているが、隅が比較的直角に近い住居址（2・4・6・7・9・10・16・19～21号）があり、他は丸味を帯びる。また17号の壁は胴張りになる。調査で確認した2号より1号が、4号より3号が、6号より3号が、8号より7号が、7号より6号が、6号より5号が、13号より11・12号が、14号より12号が、21号より19・20号が、16号より1号土壙がそれぞれ新しい、という関係を見る限り、形態による時間差を本遺跡で見い出すことは困難である。カマドの位置を見ると1・2・4・5・7号は東壁中位のやや左側に、3・8～10・12・14号は北壁やや右側に構築されるが、12は他に南壁中位に立たるカマドがある。住居址主軸に対し、ほぼ併行地点にある。重複関係により3号と4号の新旧が気になるが、統じて北壁にカマドを有するものが古く、東壁に有するものは新しい傾向にあり、ある程度の時間差を思わせる。次に中部集落の13・15号及び下部集落群（16～21号）はカマドを南東隅に構築しており、一群をなすものと思われる。ただし21号は南西隅に、16・18号はカマドの痕跡はなかったが、本群とのかかわりは掘り込み土層・カマドを壁隅に設けている点及び位置から、時間的に本群に入れても良いだろう。カマドの変遷は壁中位から、序々に隅に移行し、最後には隅に設置されることから、上部集落群→下部集落に移行がみられるといえよう。次に住居使用期間は、上部・中部住居址は重複関係にあり、カマドを同方向にもつものの重複が目立ち、また一概には言えないが、7号に対する6号の貼り床、6号に対する5号の掘り込みの深さ、また2号住居址上の1号住居址のあり方及び、遺物の面から變形土器の出土が少ない等のことから、短期間使用が伺がわれる。この他遺構として中部集落と下部集落の北側中央に井戸址・1号土壙があり、集落中央に井戸址があることは集落構成上注目されるべきことであり、共同利用を意味しているものと考えられる。それに隣接する1号土壙はこれとの関係から洗場的性格がうかがわれる。3号土壙は特異な覆土状態、遺物が検出されており、祭祀の様相をうかがわせるのであるが、意味するものは不明である。次に内部施設について触れよう。カマドは地山を掘り込んで、両袖に立石を用い構築するのが基本であり、周辺の石材散布状態から石芯粘土製カマドであろうと思われる。火床は掘り窪められ、焼土が残存している。9号のカマドのみ、火床は室内構築でなく、壁外に張り出して設けられる点は他に例をみない。貯蔵穴を有する住居址は3・7・12・14・19号に認められ、他の住居址には存在しない。3・7・19号はカマド右側に、14号は左側に、12号は3ヶ所検出され、時間差に関係ないようである。柱穴は本遺跡でも確かなるものは検出されなかつた。柱穴あるいは支柱穴と思われるピットが存

在したのは 8・12・15・17 号にすぎなく、それも不規則で、住居として上屋構造を想定すると主柱穴として役に立たないものと考えられる。住居址内に土台的な材木があり、その上あるいはくりぬいて、柱を立てたものと考えられるが、積極的根拠を検出することがなく、今後の新知見を待ちたい。周溝は 4・9 号にみられるが、全周しない。特に 4 号は西・南壁下溝内に偏平な列石が認められた。性格は不明である。床・壁の状況は調査時では地下水が浅いためか比較的軟弱であったが、床面は平坦であるものが多い。

遺物 総じて土師器が圧倒的に多く、それも壺形土器の出土量が著しく、その中に須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器が混入する程度の出土量にすぎないが、須恵器を除き当地に於てこれらは散見する程度の出土例であるのに本遺跡では多量に消費しており、また綠釉陶器の多出土は初現である。土師器は壺形土器が多いことは前述したところであるが、比較的多くの出土をみた 1・12・18・21 号をみると、1 号は口径と器高の標準は 13.2・3.7cm に中心があり、各 1cm の範囲に群を構成するものと、数は少ないが 15.5・4.8cm に中心があり、0.4cm の範囲に一群の 2 群に大別でき、底径は前後者の群とも 4.8cm を中心としてまとまるが、その幅は 1.8cm あり一様でない。12 号は灰釉陶器の多量出土住居址で、灰釉陶器（挽部のみの数値）と土師器との比較では皿形・椀形とも口径・底径・器高とも大きな数値になり、より椀形を呈している。奈良時代須恵器の口径・器高はその中間に位置し、底径が大きい点興味深い。18 号では口径・底径・器高ともバラつきが目立ち、集中点はみいだせない。また高台付土器（挽部のみの数値）に口径・器高とも大形のものが目立ち、高台を付すものと、付さないものを成形時に意識していることが伺がえる。20 号は皿形土器が目立ち、平均口径 10cm・器高 2cm 前後と小形で、壺形土器との数値を明確にしている。これらの各住居址出土土器における内面黒色処理されたものと、されないものとのこれら数値差からの特異性は見い出せないが、相対的に黒色処理されたものの方が椀形になるものが多い。整形はロクロ整形を基本とし、黒色処理されたものは口縁部でヨコミガキ、体部はナナメ・タテミガキが施されるものが多く、また放射状暗文を付されるものもある。この他變形土器は 3 号の出土遺物で大別したものが基本となり、他に小形の薬壺形のものがある。全体の器形は頸部は外反し体部中位付近で張る鳥帽子形を呈する。整形はロクロ整形を主とするが刷状工具によるヨコナデ・ヘラケズリ及び須恵器にみられる叩き整形等の方法による。小形變形土器の底部に糸切り痕を残す。鍔金形土器は 16・17 号から出土しており、厚い鍔を有し器高は比較的深い。鉢形（片口）形土器は 12 号に認められ、3 個体ある。内外面は粗いヨコヘラミガキが施され、黒褐色及び黒色を呈する。これらの胎土には茶褐色の泥岩質の石粒を含んでおり、同一地域の同一粘土で焼成されており、保存状態の関係から軟弱で器面がざらつくものがみられ、焼成はあまり良くない。須恵器の出土量は少なく、中でも大形變形土器部片が目立つが量的には少ない。表面は叩き目を残し、青灰色の焼成の良い土器である。地窯産のものであろう。この他奈良時代に比定されるヘラオコシ技法による壺形土器が出土しており、それも床面からの出土であって、当時住居内に持ち込まれたものか、伝世品であるか定かでないが、半形品で他に破片がないことから、持ち込まれた可能性が強い。また地窯

産の蓋形土器も出土しているが、坏形土器で灰釉陶器とともに移入されたものか、地窯のものとは思えないものがある。地窯はすでに消滅期にあり、その生産は細々として主として大形變形土器の生産があったことを意味している。灰釉陶器は段皿を含む皿形・椀形及び長頸瓶等の器種が出土しており、全てに高台が付される。椀形陶器片が多く出土しており、施釉は薄く、ハケ塗りのものが多く、体部全面に施こされるものは皆無である。綠釉陶器は14・20号のみで検出した4点にすぎない。この他上製紡錘車・角釘状の鉄製品・鐵滓が各一点ずつ出土したのみである。本調査で特記すべき遺物に15号覆上上面から出土した藤原時代に鋳られたと思われる和鏡と17号住居址から出土した古銭がある。和鏡が集落から出土することは珍らしい例で、綠釉陶器とともに祭祀的臭いが強い。また古銭は銅銭で、綠青がふき、腐食が著しく判読困難であったが、紹聖元宝と判じた。ともに住居址、集落構成時を判明する重要な資料である。この点と須恵器消滅及び灰釉陶器の多量の移入と消費、坏形土器の小形・皿形化、須恵器變形土器の特長である叩打技法の土師器への技術導入等一連の傾向の中で本住居址出土遺物は平安時代末葉に位置づけられよう。（小林 幸・矢口忠良）

第6章 結語

長野市浅川西条遺跡の緊急発掘調査は、昭和50年7月15日より8月19日まで、ほぼ1ヶ月にわたる長期の調査であった。しかし、炎熱に晒された労苦と、発掘調査面積の膨大さを考えた時に、やはり費用・時間の問題は調査の進行の上に大きな制約となり重苦しくのしかかってきていたことは事実である。このことを抜きにして浅川西条遺跡の発掘調査の成果をすべて語ることはできないと考える。

発掘調査に携わった調査員は、諸々の困難を研究者として真摯に受け止め、出来得る限りの努力を試み、発掘調査の延長線上で、とりあえず上梓したのが本報告書である。したがって、本報告書は、決して研究成果としてのものではなく、調査の終了した時点でのことのできた事実の報告以外の何物でもないことを明記しておきたい。

さて、本調査遺跡の概要は本報告書を一読して頂くことにより、御理解いただけると考えるが、やはり遺跡の性格としては「住居址群」として把握したい。「集落」と「住居址群」の理解の相違は多くの研究者により論議されてきているが、ここでは、「ムラ」としての「集落」ではなく、一定の使用目的を持った「家屋」が井戸を中心にして住居址群を構成していったと考えたい。第5章でも述べた如く、遺跡内の各住居址は、かなり個性が豊かである。住居址の規模・構造・付属施設などと、更には住居址内外よりの出土遺物を考慮すると、いわゆる家族生活を単位とする「ムラ」というよりも、一定の生産目的を持った共同体の生産を容易ならしめるための機能を備えた建造物（家屋）がかなり存在していたのではないかと考える。

出土遺物から推定される時間帯は平安時代末期より鎌倉期全般を貫いて考えてよさそうである。そして、文献などを併せて推考するに、やはり「證菩提院領若月庄」の問題と切り離して考えることはできない。證菩提院というのは、堀河天皇の中宮、後三条天皇の第四女尊子内親王の建立で、大治3年（1128）供養が行われている。この時同院に寄せられたのが證菩提院領である。若槻庄の範囲は明確ではないが、旧若槻村に当ると考えられている。しかし、尊卑分脈に依るときは、若槻氏の中から押田氏を称するものがあって、庄内を分知したものもある以上、押田もまた若槻庄内であったことが想推測される。天正頃の諏訪社造宮史料には若槻庄の筆頭に真弓田郷が記載されていて、明かに押田・櫛田以東が若槻庄に包含されていた如くである。従って、浅川西条遺跡は、若槻氏の分知した地域でもあり、若槻氏一族の開発を進めた所であるかと想像される。この点からは、平安時代末の庄園の成立とそれに伴って進められたであろう新地開発の経過を知る手がかりが得られはしまいかと期待がある。しかしこの問題は今回の調査を契機として、今後の課題として残された問題であろう。

最後に、炎暑の調査に引き続いて、遺物の洗滌・接合・原図の整理を担当された調査員、ま

た多忙な勤務・勉学の間に原稿をまとめられた執筆者の各位には、調査団を代表して心より御礼申し上げます。（米山一政）

第1号住居址出土遺物(No.1).....第14図

遺物 番号	器 種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考
		器高	口径	底径					外面	内面		
1	16	台付皿	2.6	15.1	5.7	口縁部は肥厚し外反・付高台	内外面ともヨコミガキ	小砂含	良	黒褐色 黒色	未面	土師器(半完形)
2	"		14.0			口縁部は外反	"	小石含	"	黒色 "	"	"
3	8	环	3.8	13.0	4.8	楕形	ロクロ整形・糸切り・	"	・軟	不良 暗褐色 茶褐色	"	"(完形)
4	9	"	3.7	12.3	5.0	"	"	"	赤褐色	黒褐色	"	"(半完形)
5	13	"	4.6	15.3	5.7	口縁部は肥厚・体部は直線的	"	"	良	黄褐色 黄褐色	"	"
6	15	"	4.6	13.3	4.9	口縁部は外反気味・楕形	"	小砂含	"	赤褐色 "	"	"
7	6	"	3.5	13.4	5.2	"	"	小石含・"	不良	赤褐色	"	"(完形)
8	1	"	4.5	14.7	5.8	楕形	"	"	"	茶褐色 茶褐色	"	"
9	17	"	3.4	13.8	5.8	口縁部は外反気味	"	"	"	灰褐色 灰褐色	"	"(半完形)
10	"	"	3.6	12.7	6.0	"	"	小砂含・"	"	赤褐色 赤褐色	"	"
11	3	"	5.1	15.5	6.0	口縁部は外反	"	小石含	良	黄褐色 黄褐色	"	"(完形)
12	4	"	3.2	13.4	5.5	"	"	"	"	"	"	"
13	12	"	3.9	13.7	5.1	口縁部は漸減・楕形	"	"	やや良	"	"	"(半完形)
14	"	"	4.7	15.3	5.8	"	"	"	良	"	"	"
15	2	"	3.6	13.4	5.5	"	・外反	"	・	不良 赤褐色	赤褐色	"(完形)
16	7	"	4.1	13.1	5.5	"	"	"	良	灰褐色	黄褐色	"
17	"		15.8			口底部は外反	"	"	・	不良 暗褐色	暗褐色	"
18	5	"	3.8	13.8	5.4	口縁部は漸減	"	"	・	赤褐色	赤褐色	"(半完形)
19	14	"	4.1	12.3	5.0	口縁部は外反	"	"	・	黄褐色	黄褐色	"
20	"		3.3	13.0	5.3	口縁部は漸減し外反	"	"	・	赤褐色	赤褐色	"
21	"		4.1	13.3	5.7	体部は厚く、直線的	ロクロ整形・糸切り・ヨコミガキ	"	・	不良 暗褐色	黒色	"
22	"		13.8			体部は直線的	"	"	良	黄褐色	"	"
23	21	"	3.5	12.7	5.0	口縁部は肥厚・楕形	"	"	"	"	"	"(完形)
24	27	"	4.0	13.7	6.3	口縁部は外反・"	"	"	"	"	"	"
25	25	"	3.7	12.9	5.1	口縁部は漸減・"	"	"	・	不良 赤褐色	"	"
26	"		13.9			"	"	"	・	ヨコミガキ	"	"
27	23	"	13.5	5.3	口縁部は肥厚・"	"	"	"	良	黄褐色	"	"
						"	"	"	・	放射状暗文	"	"
						"	"	"	・	ヨコミガキ	"	"
						"	"	"	・	放射状暗文	"	"
						"	"	"	・	ヨコミガキ	"	"
						"	"	"	・	放射状暗文	"	"

第1号住居址出土遺物 (No.2) 第15-16図

遺物番号	國	器種	法量 (cm)		形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考		
			器高	口径					外	内				
1	3	杯	3.3	13.8	6.1	口縁部は外反	ロクロ整形・糸切り・ヨコミガキ	小石含	良	赤褐色	黑色	床面	土師器	
2	26	"	4.0	13.5	5.1	"	" * " 放射状暗文	小砂含	"	黄褐色	"	"	(完形)	
3	19	"	3.9	13.1	6.0	体部は直線的	" * " * ヨコミガキ	小石含・軟	不良	赤褐色	"	"	"	
4	24	"	5.0	15.3	5.6	輪形	" * " * "	"	良	暗褐色	"	"	"	
5	10	"	4.3	13.2	4.7	口縁部は肥厚・輪形	" * " * "	" * "	不良	黄褐色	"	"	(半完形)	
6	17	"	3.5	12.8	5.3	輪形	" * " * "	"	良	"	"	"	(完形)	
7	20	"	4.8	15.7	5.1	"	" * " * "	"	"	"	"	"	"	
8	22	"		13.9		口縁部は外反	"	"	"	"	"	"	(半完形)	
9	11	"	3.2	12.8	5.4	" * 輪形	" * " * "	" * "	不良	赤褐色	"	"	"	
10	"			13.6		"	" * "	"	良	"	"	"	"	
11	28	甕	11.9	11.2	6.4	口縁部は強く外反・最大径は体部中位	外面タテヘラナデツケ・内面ヨコナデ	"	"	暗褐色	"	"	"	"
12	"			24.0		口縁部は強く屈曲・	ヨコナデ	"	"	茶褐色	黃褐色	"	"	"
13	"			22.9		弯曲はくじ穴に屈曲・最大径は体部上位	ヨコ・タテの櫛状工具による整形	"	"	暗褐色	暗褐色	"	"	"
14	"			22.5		口縁部は肥厚し・面取り	ロクロ整形	小石含	"	赤褐色	茶褐色	"	"	"
1	"			22.7		口縁部は立ち上る	"	" * "	不良	"	黄褐色	"	"	"

第2号住居址出土遺物 第16図

2	113	甕	1.9	9.2	4.3	体部は直線的・小皿形 幅平・擬宝珠フマミ	ロクロ整形・糸切り " 天井部はヘラケズリ	小石含・軟	不良	暗褐色	赤褐色	黒色	土	土師器(完形)	
3	"		1.6	16.3		口縁部は外反・最大径は体部中位	外曲ヨコナデ・内面ヨコミガキ	"	良	青灰色	青灰色	床面	頃恵器	土師器	
4		甕		10.2		頸部は強く外反・	"	"	赤褐色	黑色	"	"	"		
5	30	"		14.9		頸部はくじ穴屈曲・	"	"	暗褐色	黃褐色	"	"	"		
6	29	"		22.8		頸部はくじ穴屈曲・口底部は面取り	体部は櫛状工具による整形 体部外面は櫛状工具・他はヨコナデ	"	"	黃褐色	"	"	"	"	
7	31	"		18.0		口部に最大径・体部は円筒形	口縁部はヨコナデ・体部はヘラケズリ	" * "	不良	"	"	"	"	"	
8	"			11.2		"	外面全体は櫛状工具による整形	" * "	"	赤褐色	"	"	"	"	
9	"					体部下位の破片	外面はタタキ目	"	良	"	黄褐色	"	"	"	
10	"					"	外面はカキ目	"	"	黑褐色	暗褐色	"	"	"	
11		甕		10.4		体部最大径は肩部	ロクロ整形	"	"	黑灰色	黑灰色	"	頃恵器		

第3号住居址出土遺物 第17図

遺物番号	因数番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考
			器高	口徑	底径					外 面	内 面		
1		环		13.6		口縁部はやや外反・楕形	ロクロ整形	小石含	良	赤褐色	赤褐色	陶 土	土師器
2		"		13.5		" * "	"	"	"	黄褐色	黄褐色	"	"
3	32	"	4.0	13.5	6.2	口縁部は直立・"	" * 条切り	"	"	やや良	黒色	床面	" (完形)
4	34	"	4.0	13.6	5.7	口縁部は漸減・体部は直線的	" * "	"	良	"	"	"	" (半完形)
5	33	"	5.0	14.5	6.4	口縁部は肥厚・楕形	" * "	"	"	"	"	"	"
6	"	3.4	13.0	5.0	5.0	体部は直線的に外側し、口縁部に至る	" * "	"	・軟	不良	赤褐色	"	"
7	"	3.4	13.1	6.0	6.0	"	" * "	"	良	黄褐色	"	"	"
8	"	4.0	13.2	5.7	5.7	口縁部は肥厚・楕形	"	"	"	"	"	カマ下内	"
9	台付环	3.8	13.8	5.2	高台欠損 * "	" * " * 内面体部タテミガキ	" * "	不 良	"	"	床面	"	"
10	"			7.8	体部上半欠損・高台は低い、	"		白灰色・良	白陶釉	"			灰釉陶器
11	甕			16.0	頸部は「く」の字に屈曲	"		小石含	"	赤褐色	黄褐色	"	土師器
12	"			8.5		外面はタテナデ・内面にカキ目が残る	"	"	暗褐色	暗褐色	"	"	

第4号住居址出土遺物 第17図

13	环		7.7	高台は内傾・口縁部欠損・楕形	ロクロ整形	白色・小石含	やや良	白陶釉	床面	灰釉陶器
----	---	--	-----	----------------	-------	--------	-----	-----	----	------

第5号住居址出土遺物 第17図

14	114	环	3.3	13.0	4.5	口縁部は肥厚・楕形	ロクロ整形・条切り・放射状暗文	小石含	やや良	黄褐色	黒色	床面	土師器(完)
15	高台环	4.5	12.1	5.4	5.4	体部は直線的	"	白灰色	良	白陶釉	"	"	灰釉陶器(完)
16	"			7.3	7.3	高台は内傾・体部上半欠損	底部外面は右廻りのケズリ痕	乳白色・良	"	白透釉	"	"	"

第6号住居址出土遺物 第18図

遺物番号	因数番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考
			器高	口徑	底径					外 面	内 面		
1		环	3.6	12.7	4.6	体部は直線的・口縁部はやや肥厚	ロクロ整形・条切り	小石含	良	黄褐色	黄褐色	床面	土師器(完)
2	"	"	3.9	13.5	5.9	口縁部は肥厚・楕形	" * "	"	やや良	"	"	"	"
3	"	"		11.5		口縁部は漸減し、外反	"	"	・軟	不良	赤褐色	"	"
4	甕			23.0		頸部は強く屈曲し、口縁部は袋状	"	"	良	黄褐色	赤褐色	"	"

第7号住居址出土遺物 第18図

5	环	11.1	口縁部はやや肥厚・椀形 口縁部は外反	口縁部・外部はヨコ・内部体部タテミガキ ロクロ整形・軸は外部中位まで	小石含・良 乳白色・良	良 "白濁釉	黑色 "床面	黑色 "床面	土師器 灰釉陶器
6	台付环	15.2							

第8号住居址出土遺物 第18図

7	环	12.1	口縁部は外反・椀形 体部は直線的 口縁部は強く屈曲・最大径は体部中位	ロクロ整形 内外面ともヨコナデ 体部外面・口縁内面は櫛状工具による整形	小石含	良 "赤褐色 黑色	赤褐色 黑色	床面	土師器 "
8	"	13.1			"	"	"	"	"
9	35	21.8			"	"	"	"	"
10	甕	7.0	体部は筒形 底部は丸底	体部外面はタテヘラケズリ 体部・底部は櫛状工具による整形	"	"	"	"	"
11					"	"	"	"	"

第9号住居址出土遺物 第19図

遺物番号	図版番号	器種	法 量 (cm)		形態上の特徴	手法上の特徴	胎 土	焼 成	色 調		出土地点	備 考
			器高	口 桟 底 桟					外面	内 面		
1		环	4.0	12.6	5.0 体部は直線的 口縁部は短く、直立・稜形	ロクロ整形・糸切り 体部は櫛状工具による整形	小石含・軟	不 良	赤褐色 黄褐色	黑色 黄褐色	床面	土師器(完形)
2	37	壺	10.4	9.9	" " " "	ロクロ整形	"	"	"	"	"	"
3	"						"	"	"	"	"	"
4		甕	12.8		体部は円筒形・最大径は口底部	" · 内面は櫛状工具による	"	"	暗褐色	"	"	"
5	36	"	18.3		" " "	体部外面は櫛状工具による	"	"	赤褐色	赤褐色	カマド	"
6	"		18.8		腹部は「く」の字に屈曲	ヨコナデ整形	"	"	"	"	床面	"
7	"		21.9		"	"	"	"	茶褐色	茶褐色	"	"
8	"		24.5		" · 口底部は直立	"	"	"	"	"	"	"
9	"		22.6		口縁部は強く外反	"	"	"	暗褐色	黄褐色	"	"
10	"		26.7		" · 最大径は体部中位	体部外面はタテヘラケズリ	"	"	"	赤褐色	"	"
11	"		23.2		" · 最大径は口底部	ヨコナデ整形	"	"	"	"	"	"
12	"		32.5		" " "	体部内面は櫛状工具による	"	"	"	"	"	"

第11号住居址出土遺物……………第20図

遺物番号	圖版番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考
			器高	口径	底径					外面	内面		
1		环	3.3	11.4	4.8	口縁部は外反し肥厚	ロクロ整形・糸切り	小石含・軟	不良	暗褐色	褐色	床面	土師器
2		"	3.5	12.4	5.3	口縁部は外反・椀形	" " "	小石含	良	黒褐色	黒褐色	覆土	"
3	40	"	5.6	16.5	6.1	椀形	" " " 放射状暗文	小石含・良	良	黒褐色	黑色	"	(半完形)
4	"	"	3.3	13.1	4.6	口縁部はやや肥厚・椀形	" " "	"	やや良	暗褐色	黑色	床面	"
5	38	"	5.5	16.0	5.9	椀形	" " "	"	"	黄褐色	黄褐色	覆土	"
6	39	"	4.4	13.2	4.4	口縁部は外反し肥厚	口唇部横ナデ " " "	小砂含・良	良	黄褐色	黑色	床面	"
7		台付环		7.6		体部欠損	糸切のら高台付・ロクロナデ(左廻り)	小石含	良	黄褐色	黑色	床面	"
8	"	"	3.5	13	7.4	口縁部は肥厚・皿形	ロクロ整形・施釉は体部下位まで	乳白色	良	白透釉	黄褐色	"	灰釉陶器
9	(要)				10.3	台付甕の台部か、裾部は外反	" 糸切り後台付貼付・刻文あり	小石含	やや良	黄褐色	黄褐色	覆土	土師器
10	"				6.0	胴部上半欠損	" 糸切り	"	やや良	茶褐色	"	床面	"

第12号住居址出土遺物(№1)……………第20図

11	41	环	4.1	14.0	8.1	体部は直線的	ロクロ整形・ヘラオコシ	小石含	良	白褐色	白灰色	床面	須恵器(半完形)
12	42	皿	1.9	11.6	5.3	口縁部は外反	" 糸切り	"	"	黄褐色	黄褐色	"	土師器(完形)
13	43	"	2.1	11.0	5.6	"	" " "	"	"	赤褐色	赤褐色	"	"
14		环	2.9	11.9	5.1	口縁部は肥厚・皿形	" " "	"	"	"	"	"	(半完形)
15	47	"	3.9	12.5	5.6	" 楢形	" " "	"	"	黄褐色	黄褐色	"	"
16	45	"	4.8	15.4	6.2	口縁部は漸減し外反	" " "	"	"	黄褐色	黄褐色	"	(完形)
17	44	"	3.6	13.0	4.9	椀形	" " "	"	"	"	"	"	"
18	49	"	3.3	12.0	4.8	口縁部は外反・椀形	" " "	"	"	"	"	覆土	"

第12号 住居址出土遺物 (No.2)………第21図

遺物番号	器種	法量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状況	備考
		器高	口径	底径					外面	内面		
1	坏	12.5			楕形	ロクロ楕形	小砂含	良	赤褐色	暗褐色	床面	土師器
2	"	11.7			口縁部は外反気味	"	小石含	"	"	"	"	"
3	"	3.6	12.4	4.5	口縁部は肥厚・体部は直線的	"・糸切り・ヨコミガキ	"	やや良	暗褐色	黑色	"	"
4	48	"	3.6	13.0	4.9	口縁部は外反	"・"・"	小砂含	良	"	"	" (完形)
5	46	"	3.7	12.3	3.7	楕形	"・"・"	"	赤褐色	"	"	" (半完形)
6	"	3.6	12.8	5.8	口縁部は肥厚・楕形	"・"・"・放射状暗文	"	"	"	"	"	"
7	"	3.8	12.1	4.8	口縁部は外反	"・"・"・"	小石含	やや良	茶褐色	"	"	"
8	"	3.8	12.6	5.3	楕形	"・"・"・"	"	軟不良	茶褐色	"	"	"
9	"	3.6	12.3	5.5	"	"・"・"・"	"	良	赤褐色	"	"	"
10	"	3.7	12.3	4.2	口縁部は外反	"・"・"・ヨコミガキ	"	"	"	"	"	"
11	"	4.4	14.1	6.9	口縁部は直立・楕形	"・"・"・"	"	不 良	黄褐色	"	"	"
12	"	4.7	13.6	6.1	楕形	"・"・"・"	小砂含	良	赤褐色	"	"	"
13	"	5.5	16.6	7.0	"	"・"・"・"	"	"	"	"	"	"
14	"	3.8	12.3	4.4	口縁部は漸減・楕形	"・"・"・ヨコの暗文	小石含	"	黄褐色	"	"	"
15	"	3.0	14.1	6.0	"し外反・"	"・"・"・ヨコナデ	"	"	"	"	"	"
16	52	台付皿	2.6	12.9	5.4	口縁部は外反・体部は直線的	"	乳白色・良	白濁釉	"	"	灰釉陶器
17	54	"		16.8	輪花・底部欠損	"	"・"	"	"	"	"	"
18	51	台付环	4.4	15.0	5.8	口縁部は外反・皿形	"	白灰色・"	白濁釉	"	"	"
19	"	"	3.1	11.6	6.6	楕形	"	白 色・"	"	"	"	"
20	50	"	5.2	16.7	8.1	"	"	乳白色・"	白濁釉	"	"	"
21	53	"	4.8	16.1	7.6	口縁部は漸減し外反・楕形	"	白灰色・"	"	"	"	"
22	"	"		15.9	" 気味・"	"	乳白色・"	"	"	"	"	"

第12号住居址出土遺物(No.3)……………第22図

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考
		器高	口径	底径					外面	内面		
1	台付环		13.2			ロクロ整形・灰釉かからず	小砂含・軟	良	白灰色	床面	灰釉陶器	
2	"			7.7		"			淡褐色	"	"	
3	鉢		21.5		片口・椀形	"・内面ヨコミガキ	小砂含・"	"	茶褐色	黑色	"	土器
4	甕	59		7.0	最大径は体部中位・下腹れ	体部外面ヨコの櫛状工具による整形	小石含	"	暗褐色	黃褐色	"	
5	"	55		11.3	"	ロクロ整形	小砂含・"	"	"	黒褐色	"	
6	"	56		11.4	"	"	小石含・"	"	赤褐色	黃褐色	"	
7	"	57		8.5	袋状口縁・最大径は体部中位	"	小石含・"	不	良	黃褐色	覆土	
8	"		15.8		" "	"	小砂含・"	"	暗褐色	床面	"	
9	"		24.1		口縁部肥厚・"	"	"	良	黒褐色	赤褐色	"	
10	"		23.2		" "	"	"	"	赤褐色	"	"	
11	甕	58		21.4	"・頸部の屈曲は穢やか	"	"	やや良	黄褐色	"	"	
12	壺	60			長頸・最大径は体部上位	"	"	やや良	白	綠	覆土・床面	灰釉陶器
13	筋錐車	61		1.8	4.1	ナデ整形	小砂含	"	赤褐色	"	"	土製器

第13号住居址出土遺物……………第23図

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考
		器高	口径	底径					外面	内面		
1	台付環			7.3	体部欠損、高台は強く聞く	高台部横ナデ・糸切り後高台貼付	小石含	良	黄褐色	黃褐色	覆土	土器
2	甕			4.6	胴部以上欠損	ロクロ整形・糸切り	"	やや良	赤褐色	灰褐色	"	
3	台付甕			11.4	胴部以上欠損、瓶縫部は覗く外反	"	"	良	黄褐色	黒褐色	"	
4	環			13.8	口縁部は直立に近い・椀形	"	"	軟不	良	赤褐色	"	"

第14号住居址出土遺物……………第23図

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考
		器高	口径	底径					外面	内面		
5	台付皿		2.2		高台欠損・口縁部は肥厚し外反	内外面ていねいなミガキ	小砂含・良	良	黒色	黒色	床面	土器
6	環		14.2		器肉薄く、体部中位に稜線・椀形	ロクロ整形	"	軟	やや良	黄褐色	黄褐色	"
7	"	3.6	12.9	5.5	口縁部は外反・"	"・糸切り	小石含	良	"	"	"	(半完)
8	"	3.2	13.2	5.5	口縁部は肥厚し外反・"	" "	"	"	黒色	"	"	
9	台付環	4.5	14.1	6.7	高台欠損・"	" "	"	やや良	茶褐色	茶褐色	"	
10	"	4.0	14.0	5.0	体部は直線的・口縁部はやや外反	" "	"	良	暗褐色	灰褐色	"	須恵器
11	甕	64	20.5	5.5	頭部 ^左 Y字口縁 ^右 切妻的・体部中位前方大斜	上半ヨコナデ・外面下半はヘラケズリ	"	"	黄褐色	暗褐色	カマド内	土器
12	"		22.4		上半ロクロ整形・下半ヘラケズリ・内面カキ目	"	"	赤褐色	黄褐色	"	"	

第15号住居址出土遺物 第24図

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考	
		器高	口径	底径					外面	内面			
1	坏	2.7	9.5	4.1	体は直線的	ロクロ整形・糸切り	小砂含・軟	不良	黄褐色	赤褐色	覆土	土師器(半完形)	
2	65	"	3.7	13.0	5.8	口縁部外反・椀形	"	"	小石含	良	暗褐色	"	"
3	"	3.9	12.6	4.5	口縁部は肥厚し直立・椀形	"	"	"	軟	不良	黄褐色	"	"
4	"	3.8	12.6	4.5	" 外反・ "	"	"	"	"	"	赤褐色	"	"
5	"	11.2	5.1	"	直立・ "	"	"	"	"	"	黑色	"	"
6	66	台付坏	5.8	12.9	6.2	椀形	"	"	小砂含	良	灰黒色	"	"
7	"		15.8			口縁部は肥厚・椀形	"	"	"	良	赤褐色	暗褐色	"
8	"	5.5	13.2	6.3	" し外反・椀形	"	"	小石含・軟	不良	黄褐色	黑色	"	"
9	67	"		7.0		椀形	"	"	"	"	暗褐色	黄褐色	"
10	68	石 磐	31.0	6.0	7.2		敲打法		安山岩	灰色	カマド	石製品	

第16号住居址出土遺物 第24図

11	蓋	15.6			口縁部は嘴状に屈曲	ロクロ整形・天井部ヘラケズリ	小石含	良	黄灰色	赤褐色	覆土	須恵器
12	坏	3.3	9.9	4.2	体部中位で屈曲 体部中位で屈曲	"	"	"	赤褐色	"	床面	土師器
13	"		14.8		椀形	"	"	軟	不良	茶褐色	黑色	"
14	70 鍔 签	21.2			口縁部は内傾	口縁部は指圧整形のちヨコナデ	"	"	黒褐色	暗褐色	"	"
15	69 瓢	20.0			底部の屈曲は浅い・最大径は体部中位	ロクロ整形・体部はタタキ整形	"	"	黄褐色	黄褐色	"	"

第17号住居址出土遺物 第25図

1	坏	2.7	6.3	3.8	体部は直線的	ロクロ整形・糸切り	小石含	やや良	赤褐色	赤褐色	床面	土師器
2	"	2.0	10.6	4.8	口縁部は漸減し外反・直形	"	"	良	黄褐色	黄褐色	"	"
3	"		12.6		" 体部は直線的	"	"	"	黒色	"	"	"
4	"		12.6		" 楠形	"	"	軟	不良	赤褐色	"	"
5	71 鍔 签	18.9	22.6	8.0	口縁部は内鷲気味・面取り・底部丸底	口縁部指圧整形・体部ケズリ様ナデ	"	やや良	暗褐色	黄褐色	"	(完形)
6	72	"	25.0		口縁部は直立・鍔は下方に垂れる	"	"	良	黄褐色	赤褐色	"	"
7	73	"	24.8		" * " * 面取り	" * ヨコナデ	"	"	赤褐色	黄褐色	"	"

第18号住居址出土遺物（No.1）……………第26図

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態	備考	
		器高	口径	底径					外面	内面			
1	环	3.3	9.3	4.1	口縁部は肥厚・体部は直線的	ロクロ整形・糸切り	小石含	良	黄褐色	灰褐色	床面	土師器	
2	"	"	11.6	"	口縁部は漸減・"	"	"	"	赤褐色	黄褐色	腹土	"	
3	81	"	3.6	12.1	4.5	口縁部は肥厚・"	"	"	"	黄褐色	"	床面	"(半完形)
4	75	"	3.3	11.1	4.3	"	"	"	"	"	"	"	(完形)
5	"	3.3	11.1	4.4	"・体部中位で膨曲	"	"	"	"	"	"	"	"
6	80	"	3.4	11.3	4.6	口縁部は外反	"	"	"	"	"	腹土	"(半完形)
7	76	"	3.6	11.3	5.2	"・椀形	"	"	軟	不良	赤褐色	"	"(完形)
8	74	"	3.4	11.5	5.5	"・"	"	"	良	黄褐色	"	床面	"
9	"	2.8	12.2	5.6	口縁部は漸減し外反	"	"	"	不良	赤褐色	赤褐色	"	"
10	"	3.0	11.2	4.7	"	"	"	"	黄褐色	黄褐色	腹土	"	
11	79	"	3.4	12.1	4.1	口縁部肥厚し外反・椀形	"	"	"	赤褐色	"	床面	"(半完形)
12	"	3.7	12.2	4.9	口縁部は外反・"	"	"	"	良	黄褐色	"	"	"
13	78	"	3.7	11.9	4.3	椀形	"	"	"	赤褐色	"	"	"
14	"	3.6	11.6	4.7	口縁部は外反・"	"	"	"	"	"	"	"	"
15	"	3.3	11.6	4.7	"	"	"	"	黄褐色	"	"	"	"
16	"	3.9	12.9	4.0	口縁部は漸減し外反	"	"	"	赤褐色	"	腹土	"	"
17	"	3.6	11.2	4.8	口縁部は外反	"	"	"	"	黒褐色	床面	"	"
18	"	12.4	"	"	・椀形	"	"	"	"	黑色	"	"	"
19	"	5.0	14.5	4.5	口縁部は肥厚し外反	"	"	"	"	"	"	"	"
20	"	13.9	"	"	椀形	"	"	"	黄褐色	"	"	"	"
21	台付杯	5.5	11.3	5.3	口縁部は肥厚し外反・椀形	"	"	"	不良	"	"	"	"
22	"	11.9	"	"	口縁部は直立・"	"	"	"	灰褐色	"	"	"	"
23	"	14.6	"	"	口縁部は外反・"	"	"	"	良	黄褐色	"	"	"
24	"	5.7	13.3	5.4	体部は直線的	"	"	"	ヨコミガキ	"	"	"	"

第18号住居址出土遺物(No.2).....第27図

遺物 番 号	器 種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	燒 成 外 面	色 調 内 面	出 土 状 態	備 考
		器高	口 徑	底 径							
1	坏	13.9			口縁部は外反・椀形	ロクロ整形・糸切り・放射状暗文	小石含・軽	不良	黄褐色 黒色	床 面	土師器
2	"	14.5			輪形	" * " * "	" * "	"	"	土	"
3	83 台付坏	6.7	15.2	7.7	"	" * " * "	"	良	"	"	"
4	84 "			7.0		" * " * "	" * "	不良	暗褐色	床 面	"
5	坏	10.4			体部中位で屈曲し、外反	ヨコミガキ	小石含・良	良	黒色	"	"
6	甕	21.2			腹部は強く屈曲・面取り	ヨコナデ	小石含	"	黄褐色 黄褐色	"	"
7	85 "	10.8	9.3	5.4	" · 最大径は体部中位	ロクロ整形・糸切り	" · 軽	不良	赤褐色	"	"
8	"	12.4			" * "	"	" * "	"	"	"	"

第19号住居址出土遺物.....第27図

9	1 坏	4.1	14.6	8.5	口縁部は僅かに外反・体部は直線的	ロクロ整形・底部はヘラケズリ	小石含	良	青灰色 青灰色	覆 土	須恵器
10	116 高台坏	6.3	15.8	6.8	口縁部は肥厚し、外反・椀形	" · 底部は糸切のちナデ	" · 良	"	灰褐色 灰褐色	床 面	" (半完成)
11	87 盆	1.7	9.6	3.3	体部は内凹	" · 糸切り	"	"	黄褐色 黄褐色	"	土師器(完成)
12	86 坏	2.4	9.2	4.4	口縁部は肥厚・皿形	" · "	小砂含	"	"	"	"
13	115 台付坏	3.3	9.8	4.6	" · 梗形	" · " · 内面ミガキ様ナデ	小石含・軽	不良	"	"	"
14	88 "	6.2	12.2	6.3	" * "	" · " * "	小砂含 · "	"	赤褐色 黒色	"	"
15	皿	13.6			口縁部やや外反	"	白 色	良	白透釉	覆 土	灰釉陶器
16	段 盆	13.4			口縁部は漸減し・外間	"	乳白色	"	"	"	"
17	甕	19.6			腹部がく字形に屈曲・最大径体部中位	ヨコナデ	小石含	"	赤褐色 黄褐色	床 面	土師器

第20号 住居址出土遺物 (No.2) ······ 第28図

遺物番 号	図 版 番 号	器 種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎 土	燒 成	色 調		出土状態	備 考	
			器高	口 径	底 径					外 面	内 面			
1	91	皿	1.3	9.8	3.8	片口・口縁部は大きく外反	ロクロ盤形・未切り	小石含	良	赤褐色	黄褐色	床面	土師器	
2	94	"	1.8	10.2	4.2	口縁部は素盞に立ち上る	" * "	"	"	"	黒褐色	"	"	
3	90	"	1.8	9.0	3.0	"	" * "	"	"	黄褐色	黄褐色	"	(半完形)	
4	92	"	2.1	10.3	3.1	"	" * "	"	"	"	"	"	"	
5	93	"	2.0	10.0	2.9	"	" * "	"	"	赤褐色	"	"	(完形)	
6	"	2.3	9.8	4.0	"	" * "	"	"	"	赤褐色	"	"	(半完形)	
7	95	"	2.1	9.9	4.0	口縁部は外反	" * "	"	"	"	暗褐色	"	"	"
8	89	"	2.0	9.7	3.6	"	" * "	"	"	"	黒褐色	"	"	"
9	"	2.4	10.2	3.8	"	" * "	"	"	"	黄褐色	赤褐色	"	"	
10	97	"	2.6	9.8	3.3	"	" * "	"	"	赤褐色	"	"	(完形)	
11	96	"	2.5	9.8	3.6	口縁部は肥厚・外反	" * "	"	"	黄褐色	黄褐色	"	"	
12	98	台付环	3.3	10.4	4.5	口縁部は外反・体部は直線的	" * "	"	"	赤褐色	赤褐色	"	"	
13	99	"	4.1	13.4	4.3	・体部やや弯曲	" * "	"	"	"	"	"	"	
14	"	5.8	14.4	6.0	"	" * "	"	"	軟不 良	"	黄褐色	"	"	
15	100	"	4.4	14.1	4.8	口縁部は外反・椀形	" * "	"	"	黄褐色	赤褐色	"	"	
16	"			14.8	" * "	"	"	"	良	赤褐色	"	"	"	
17	"			15.3	"	口縁部は漸減し外反・椀形	"	"	"	黄褐色	黄褐色	"	"	
18	"			14.7	"	口縁部はやや外反・"	" * "	"	軟不 良	赤褐色	赤褐色	"	"	
19	101	"	4.8	13.0	5.0	"	" * " * 放射状暗文	"	やや良	"	黒色	"	"	
20	"			13.5	"	口縁部は外反・椀形	"	"	良	"	"	"	"	
21	"			15.0	"	口縁部はやや外反・椀形	"	"	軟不 良	赤褐色	黒色	"	"	
22	"	5.3	14.5	7.1	"	口縁部は外反・"	" * 付高台	"	"	"	"	"	"	
23	102	"	5.2	13.8	5.3	" * "	" * "	"	"	黄褐色	"	"	"	
24	"			13.3	"	椀形・高台端部欠損	" * 細切り・付高台	"	"	"	"	"	(半完形)	
25	"			7.0	"	体部上半・底部欠損	"	"	乳白色・良	"	"	"	灰釉陶器	
26	"			5.6	"	造り出し高台・椀形	"	"	白帶元色・良	"	深緑色	"	綠釉陶器	

第21号 住居址出土遺物 ······ 第28図

27	117	环	4.0	13.4	5.1	口縁部はやや外反・椀形	" * "	小石含・軟	不 良	赤褐色	赤褐色	"	土師器(半完形)
28	"			8.4	"	口縁部は漸減直立・"	"	"	"	黄褐色	黒褐色	"	"
29	"			9.6	"	" * "	"	小砂含	良	赤褐色	黄褐色	"	"
30	118	段	2.7	11.6	6.2	体部は直線的	"	淡黄色・良	"	白濁釉	"	"	灰釉陶器(完形)

第3号土墙出土遗物 第29图

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎 土	燒 成	色 調		出土状態	備 考
		器高	口径	底径					外 面	内 面		
3	104 台付皿	3.0	10.4	6.2	皿部は水平に近い	ヨコナデ・付高台	小石含	良	黄褐色	黄褐色	土師器(完形)	
4	105 "	2.8	10.1	4.2	皿部は直線的に外開	" " "	"	"	"	"	"	(半完形)
5	"		13.0		" - 底部・台部欠損	ロクロ整形・未切り	"	"	"	"	"	"
6	106 壺	4.3	13.9	4.4								
7	107 台付壺	2.8	10.5	4.5	口縁部は肥厚し外反・皿形	" " "	"	"	暗褐色	"	"	"
8	108 台付壺	4.2	10.5	6.2	口縁部は肥厚・椀形	" " " - 付高台	"	"	"	暗褐色	"	"
9	109 壺	7.0	14.6	7.0	口縁部は漸減し外反・椀形	" " "	"	"	黒色	"	"	"
10	103 小形壺	3.9	6.0	2.0	口縁部は漸減し立ち上がる	全面ヨコミガキ	"	"	不 良	淡褐色	暗褐色	"

第4号土攢出土遺物 第29圖

11 壊 11.0 体部は直線的 ロクロ整形 小石含 不良 黄褐色 黒褐色 褐土 土師器

井戸 排出 土 遺 物 第29図

2	111	坏	3.6	14.3	5.9	体部は内窓・皿形	ロクロ整形・糸切り	小石含	やや良	赤褐色	黄褐色	纏	土	土師器(完形)
---	-----	---	-----	------	-----	----------	-----------	-----	-----	-----	-----	---	---	---------

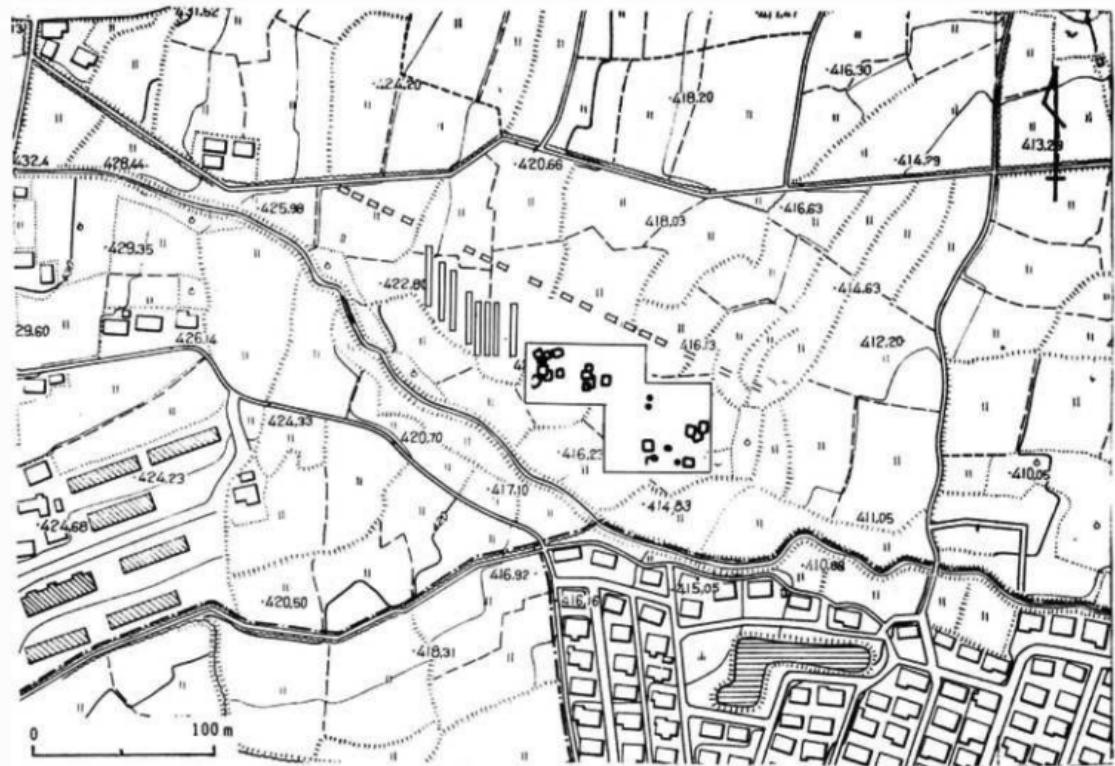
そ の 他 の 遺 物 第29図

1	110	瓶子		7.9	最大径は肩部 口縁部は外反気味・楕形	輪横成形のちナデ整形 ロクロ整形・糸切り	小砂含・良 小石含・軟	良 不	黒褐色 黄褐色	暗褐色 黑色	紺土下、直立	土器
12		坏									B A +10	"
13	112	台付坏			口縁部は漸減し外反	" " "	"	良	暗褐色	暗褐色		"



第1図 浅川西条遺跡周辺主要遺跡分布図（1：20000）

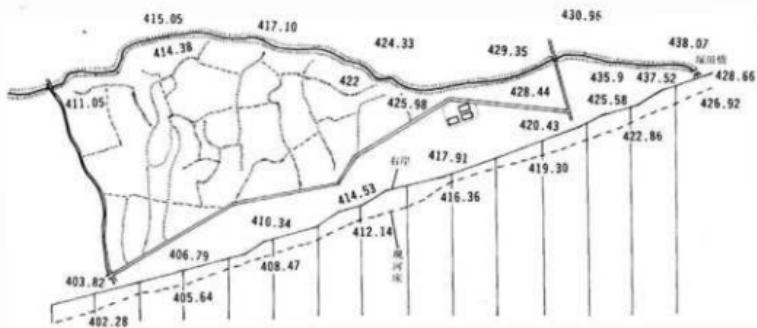
- 1.浅川西条遺跡 2.神奈橋遺跡 3.浅川道路 4.長野吉田高校グランド遺跡
- 5.圓転車輛基地道路 6.浅川農協前道路 7.下宇木呂遺跡 8.三輪小学校道路
- 9.丸目道路 10.清水道路 11.蟹沢道路 12.湯谷東古墳群 13.若月城跡



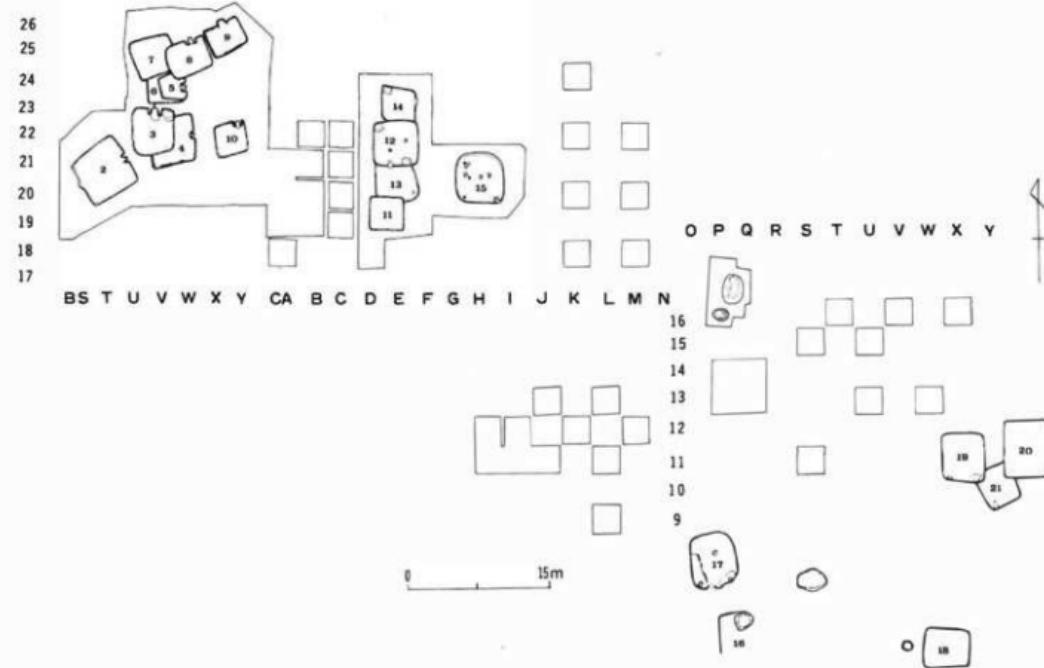
第2图 浅川西条道路地形图 (1:3000)



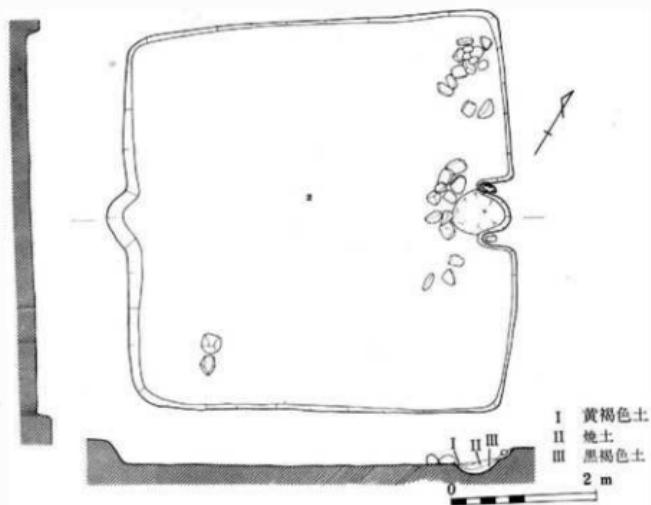
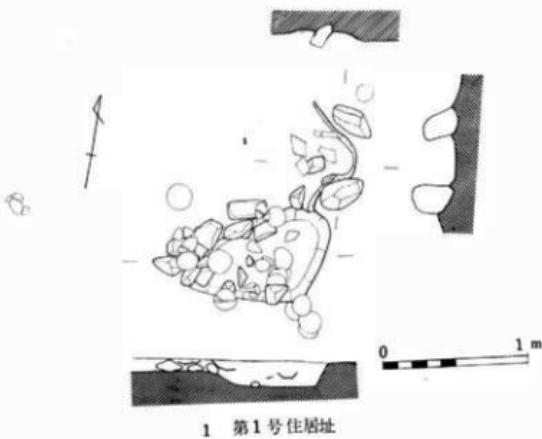
第3図 浅川西条道路付近の集落（1：100000）



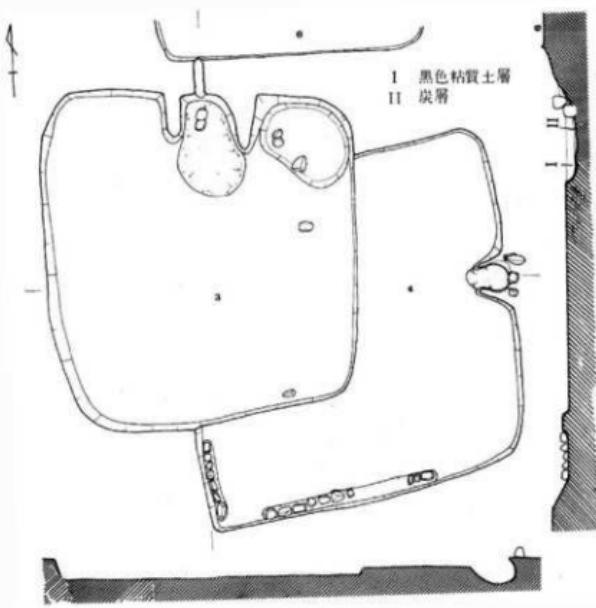
第4図 浅川西条道路付近駒沢川の断面図（1：600）



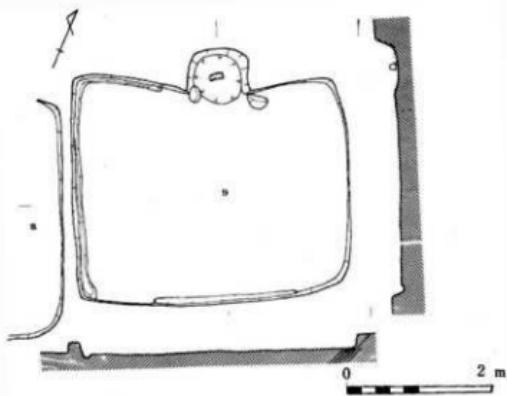
第5図 浅川西条遺跡遺構分布図(1:600)



第6图 第1·2号住居址 (1:80)

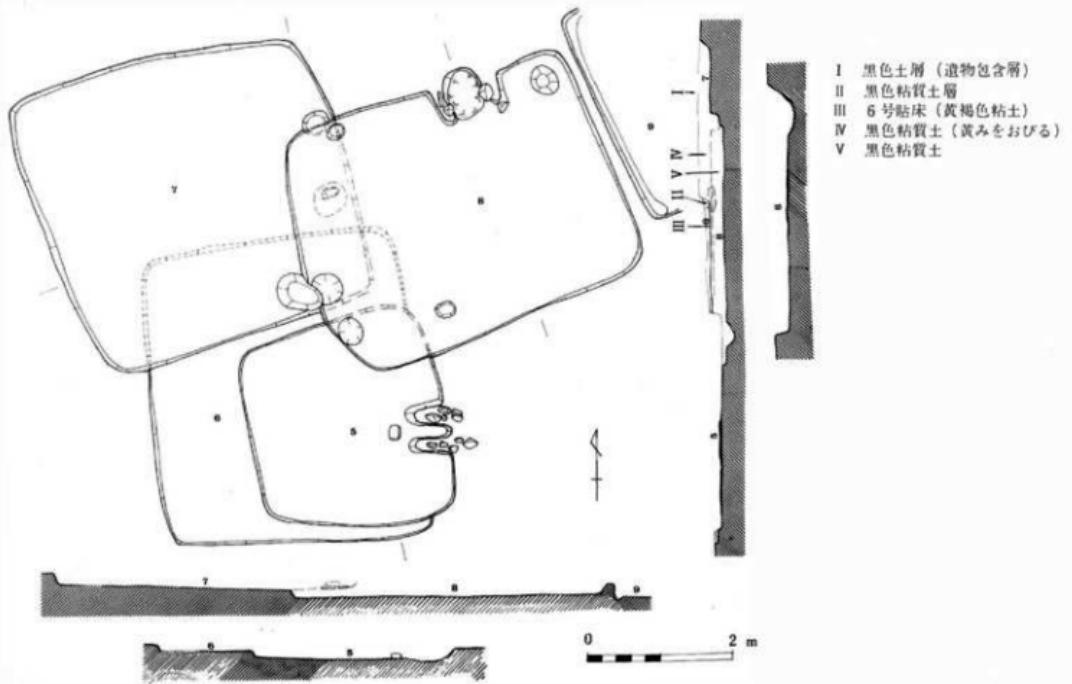


1 第3·4号住居址

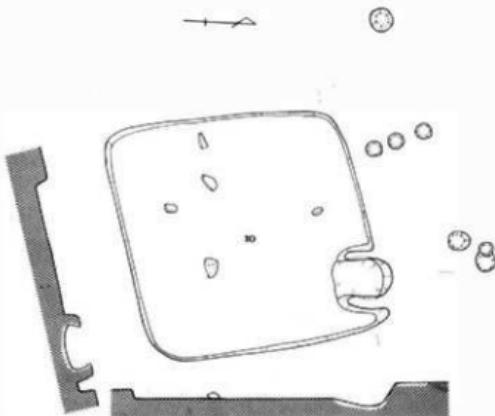


2 第9号住居址

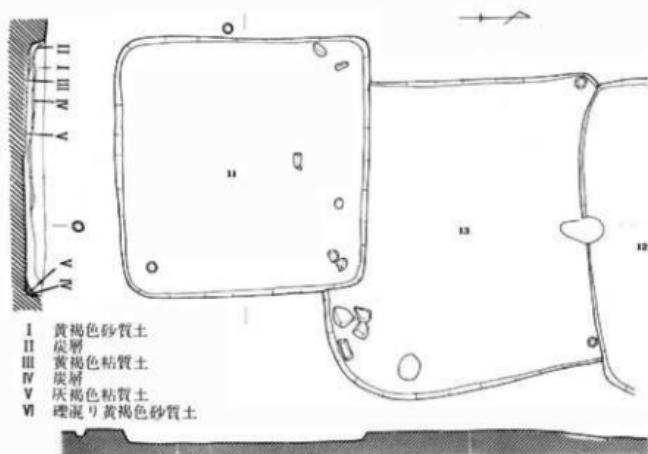
第7团 第3·4·9号住居址 (1:80)



第8図 第5・6・7・8号住居址 (1:80)



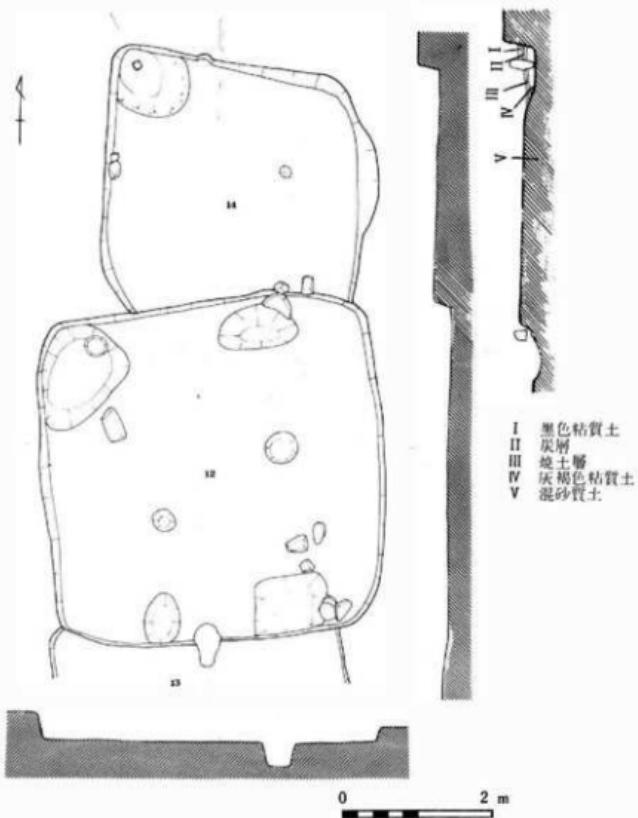
1 第10号住居址



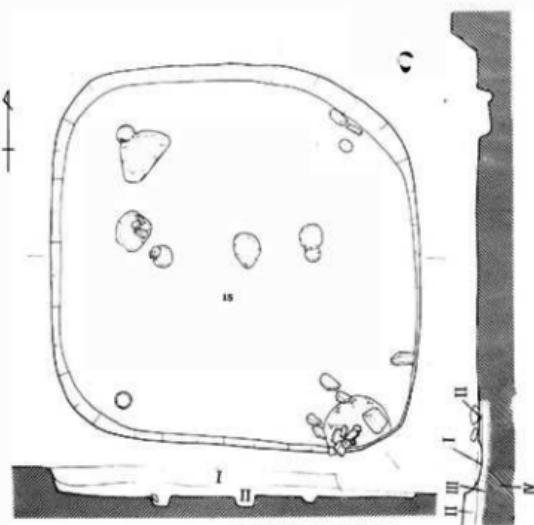
2 第11・12号住居址

0 2 m

第9図 第10・11・13号住居址 (1 : 80)

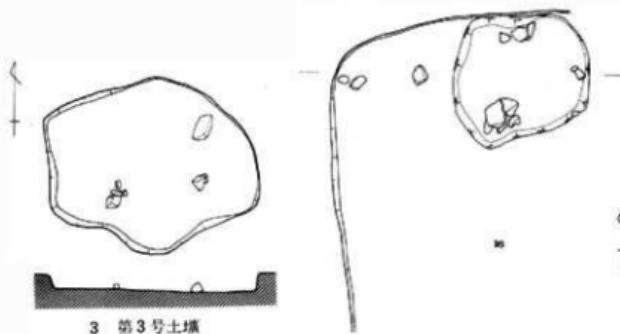


第10圖 第12·14號居址 (1 : 80)



1 第15号住居址

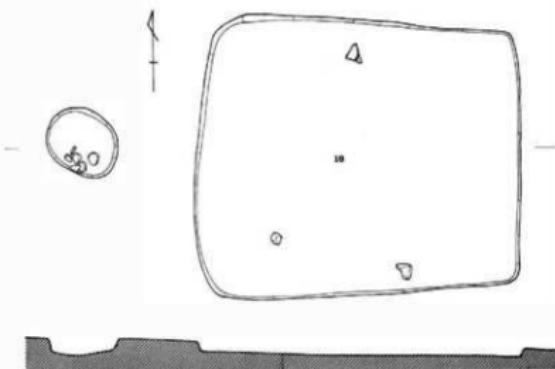
I 炭化物混り黒色土層	I 焙土層
II 砂混り黒色粘質土層	II 黄色砂層
	III 砂利混り黒色粘質土層
	IV 黄色砂質土層



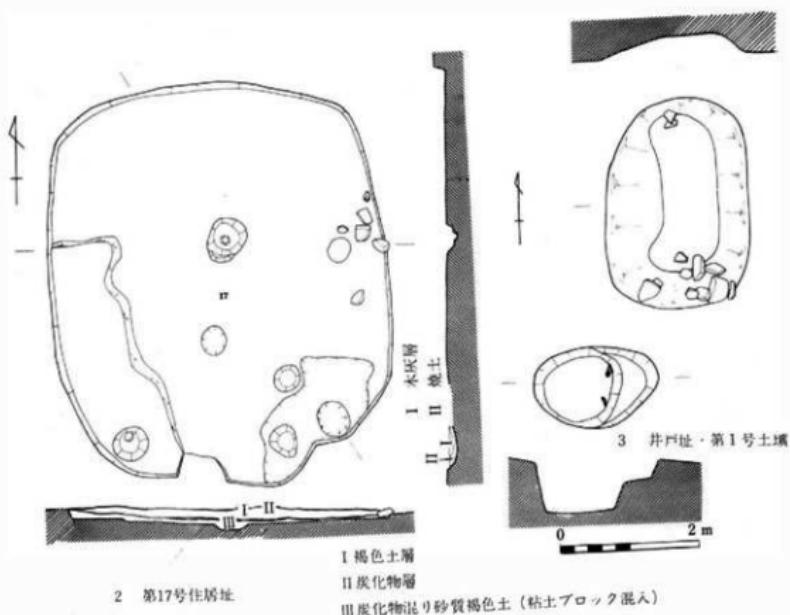
3 第3号土壤

2 第16号住居址・第2号土壤

第11図 第15・16号住居址・第2・3号土壤 (1 : 80)

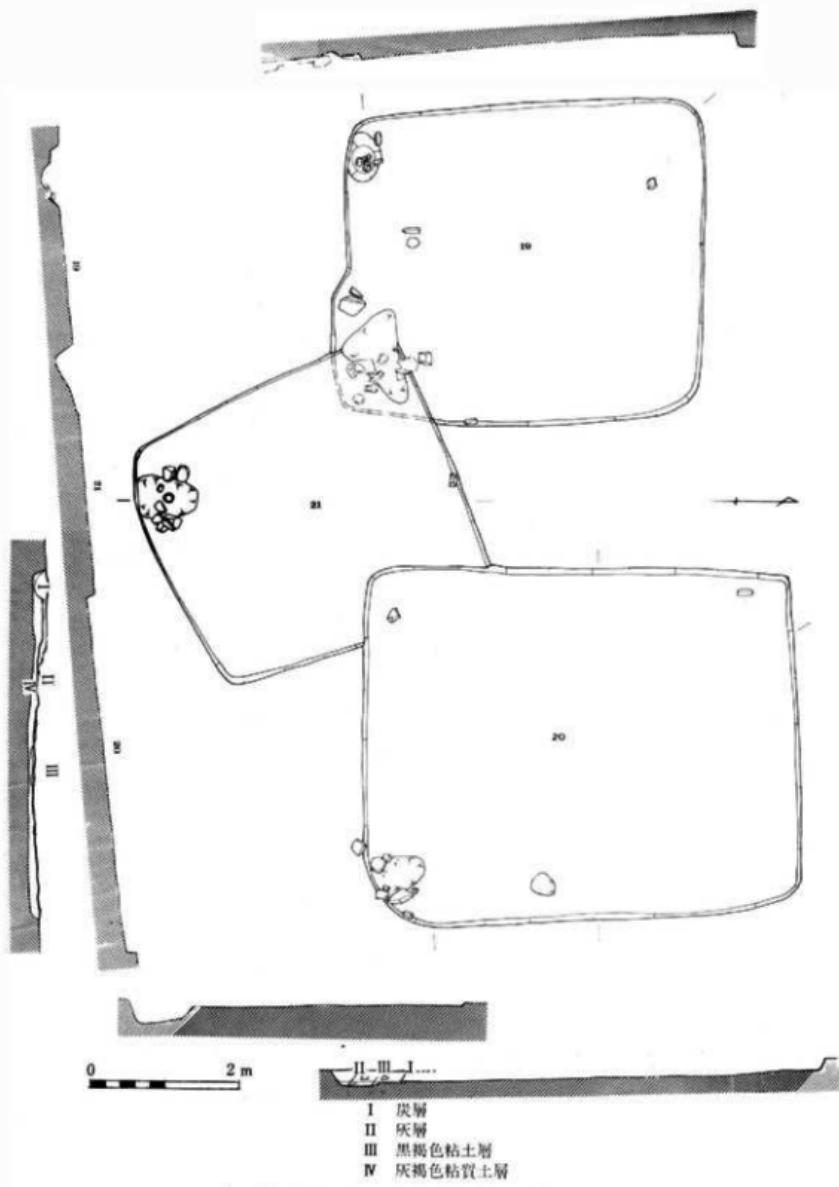


1 第18号住居址、第4号土壤

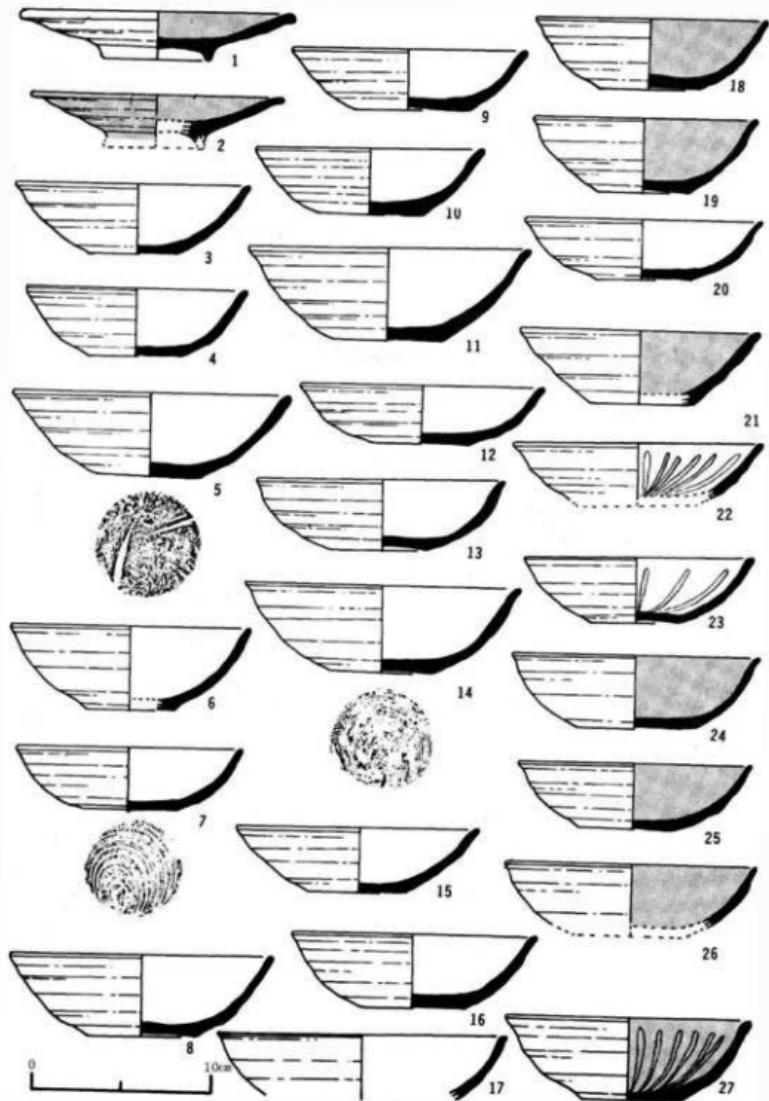


2 第17号住居址
III炭化物混り砂質褐色土（粘土ブロック混入）

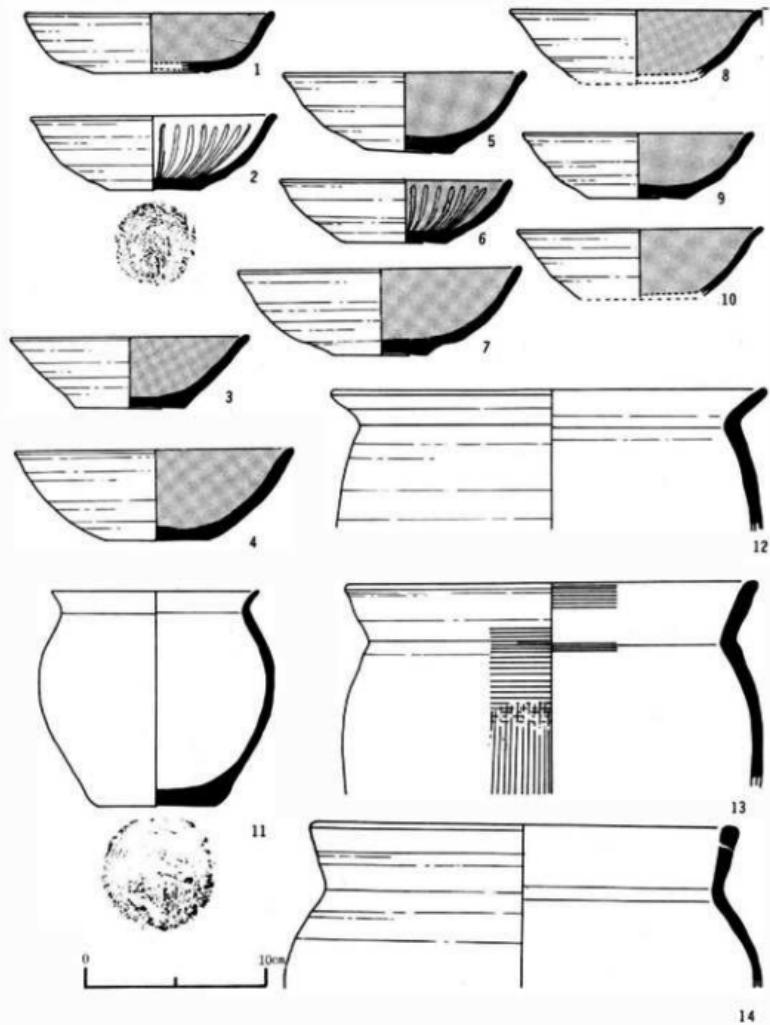
第12図 第17・18号住居址、井戸址、第1・4号土壤 (1 : 80)



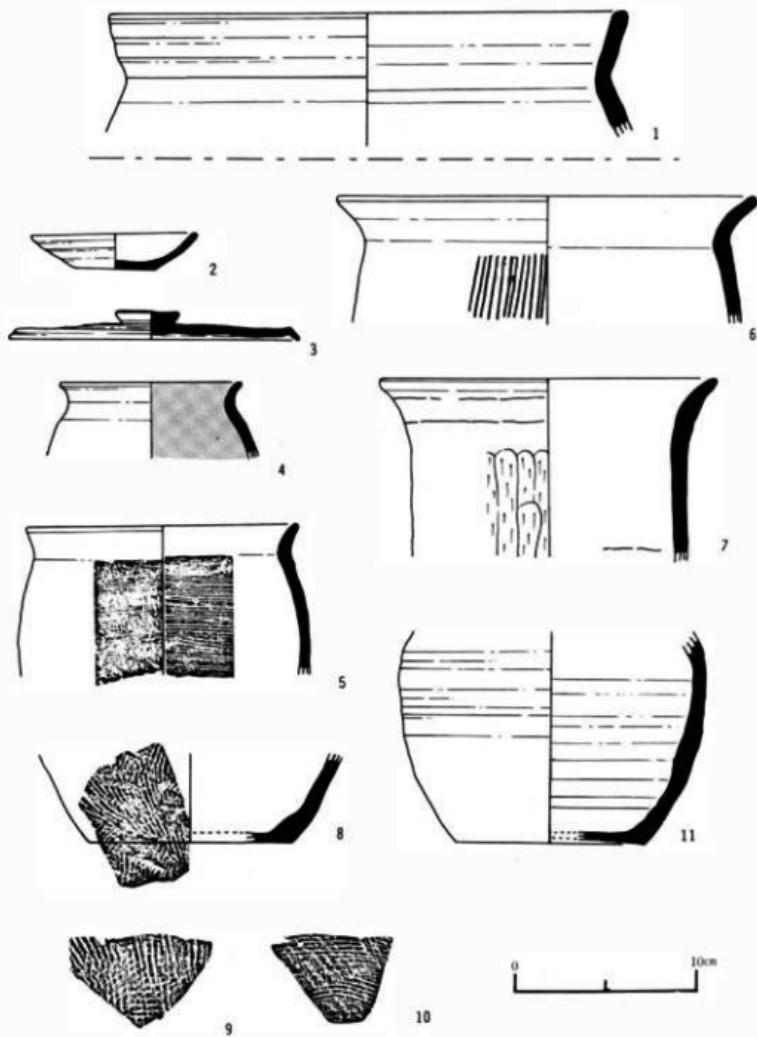
第13図 第19・20・21号住居址 (1 : 80)



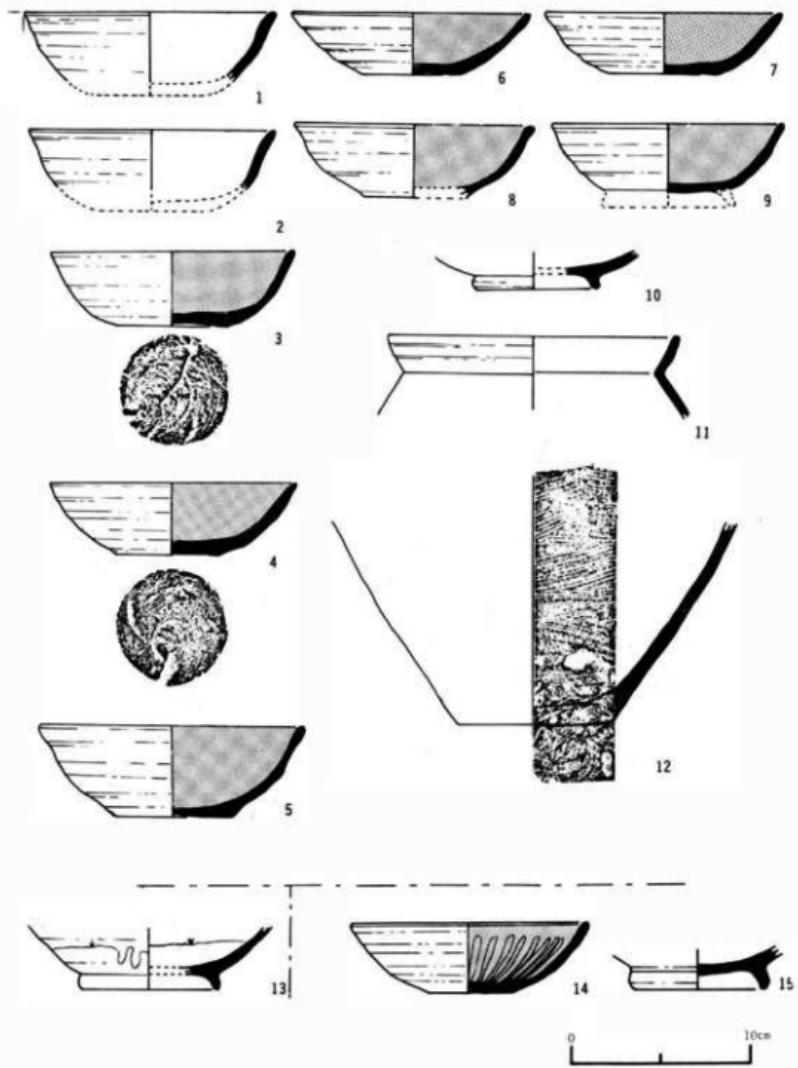
第14図 第1号住居址出土遺物 (1 : 3)



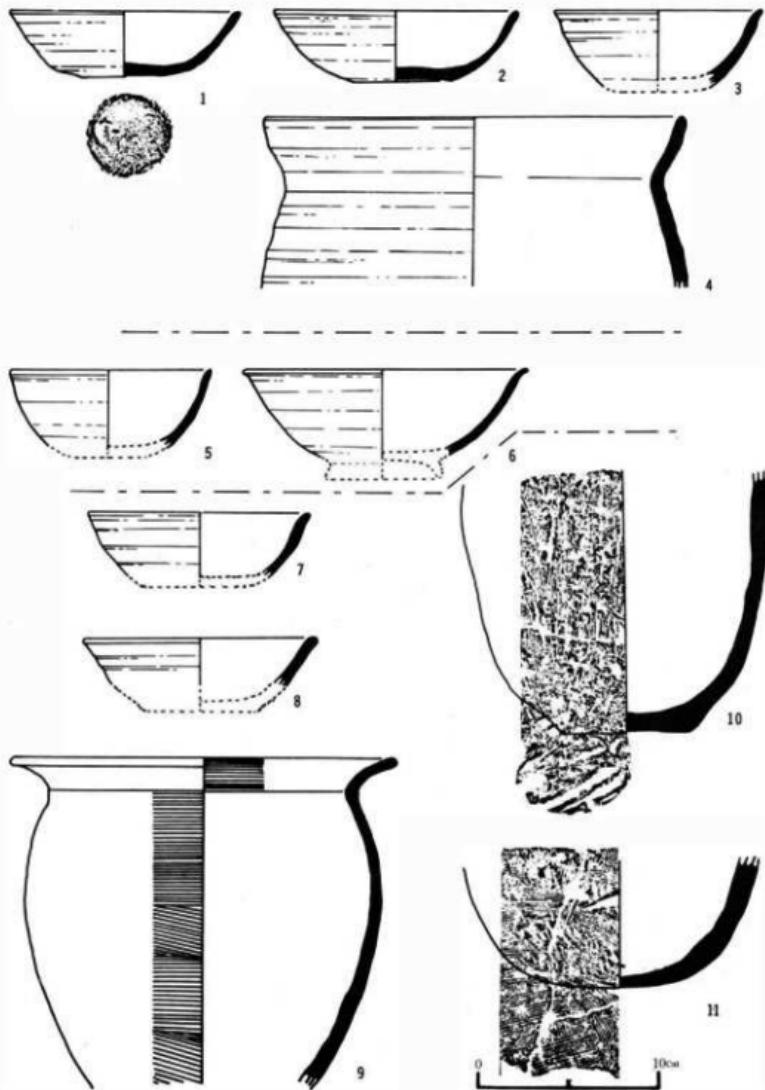
第15图 第1号住居址出土遗物(1:3)



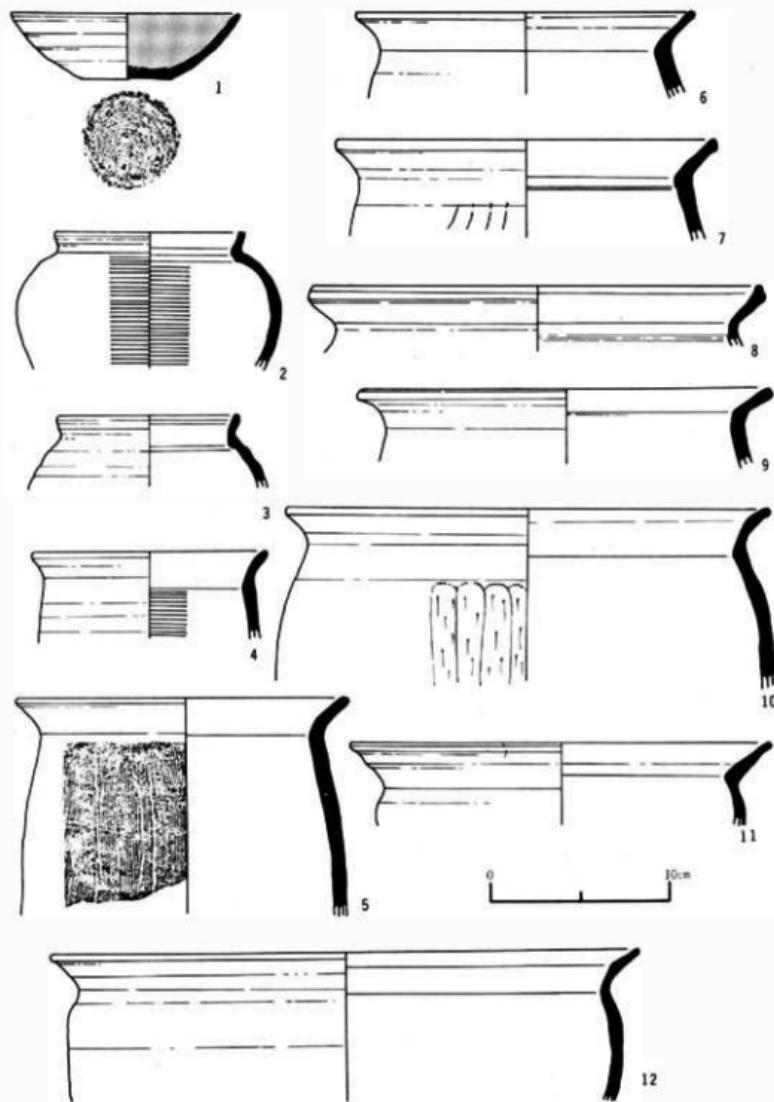
第16図 第1号(1)・2号(2~11)住居址出土遺物(1:3)



第17図 第3号(1-12)・4号(13)・5号(14・15)住居址出土遺物(1:3)

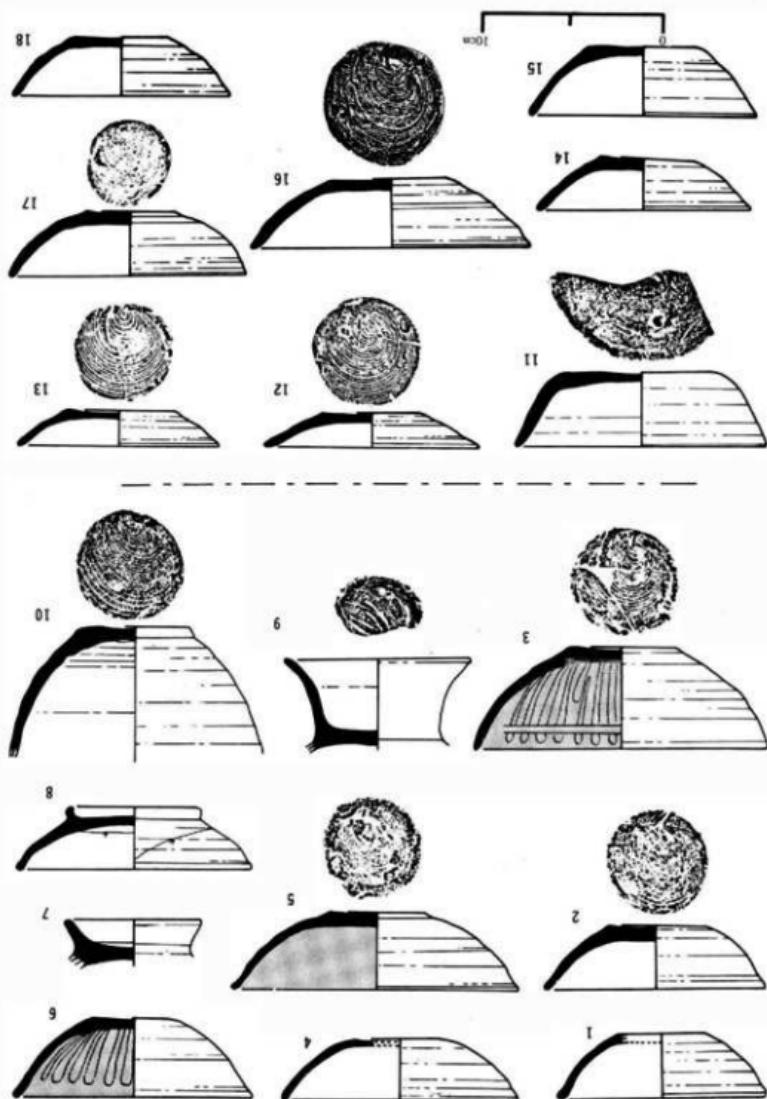


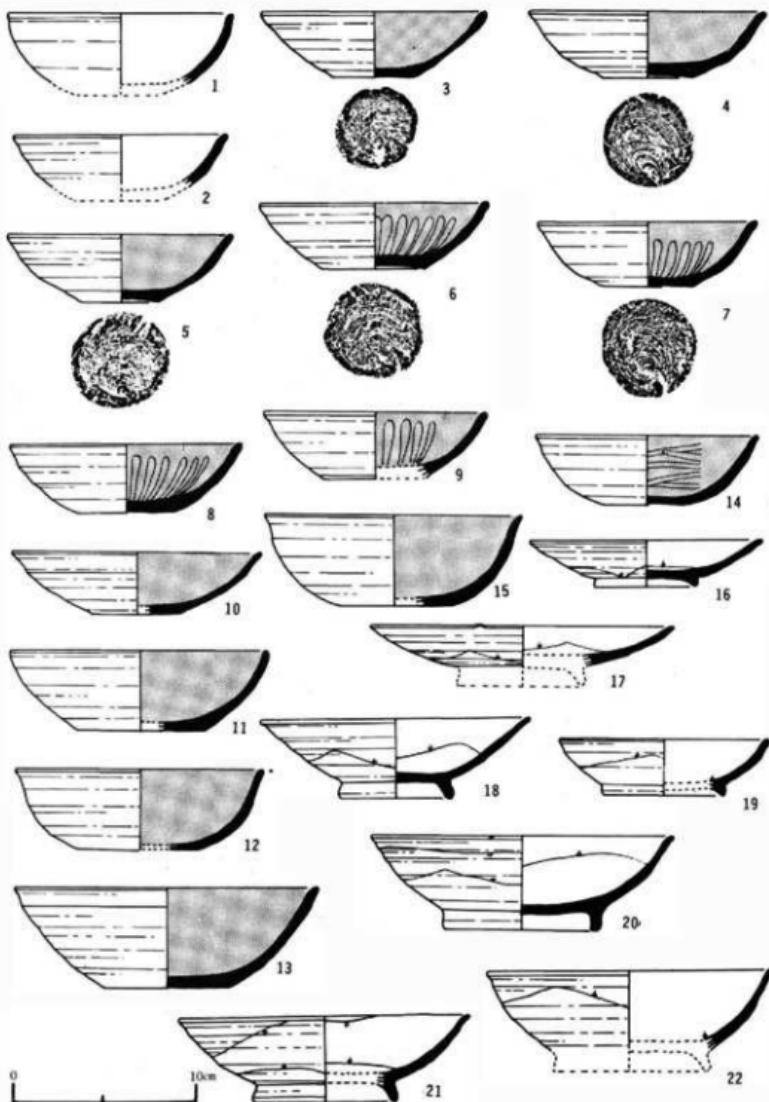
第18図 第6号(1~4)・7号(5~6)・8号(7~11)住居址出土遺物(1:3)



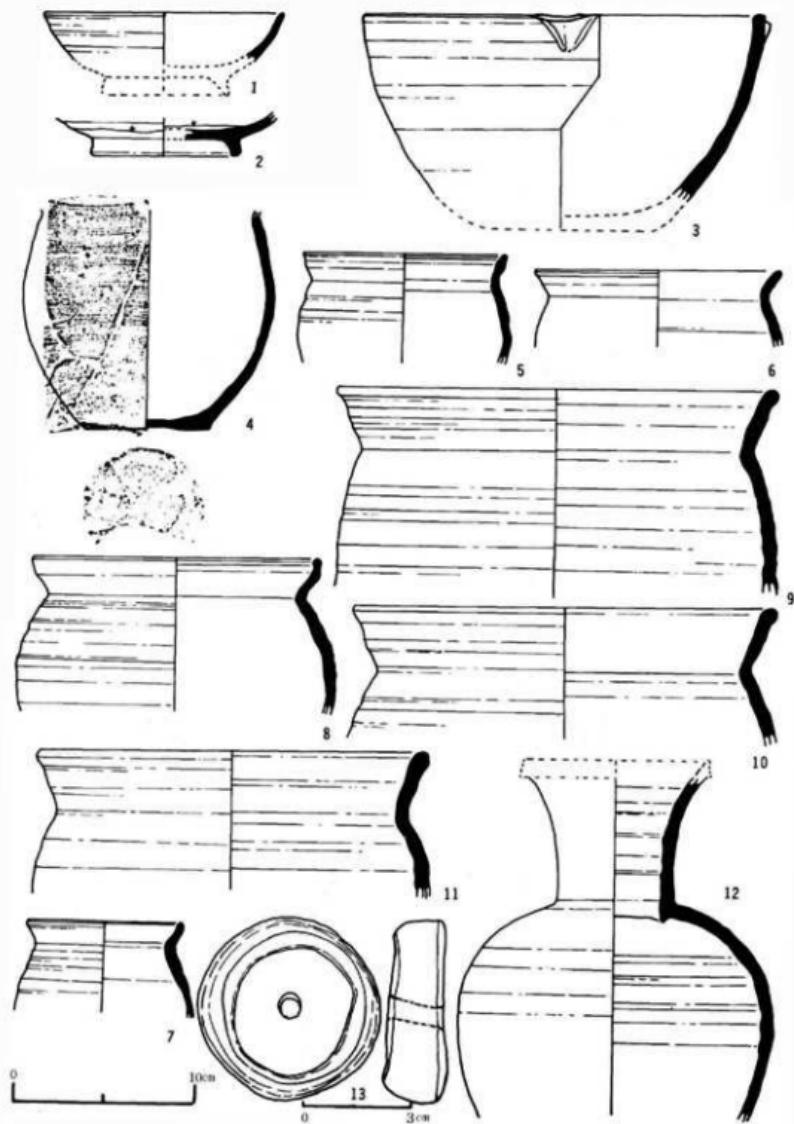
第19図 第9号住居址出土遺物（1：3）

第20圖 11号(1~10)・12号(11~18) 佐原出土遺物 (1:3)

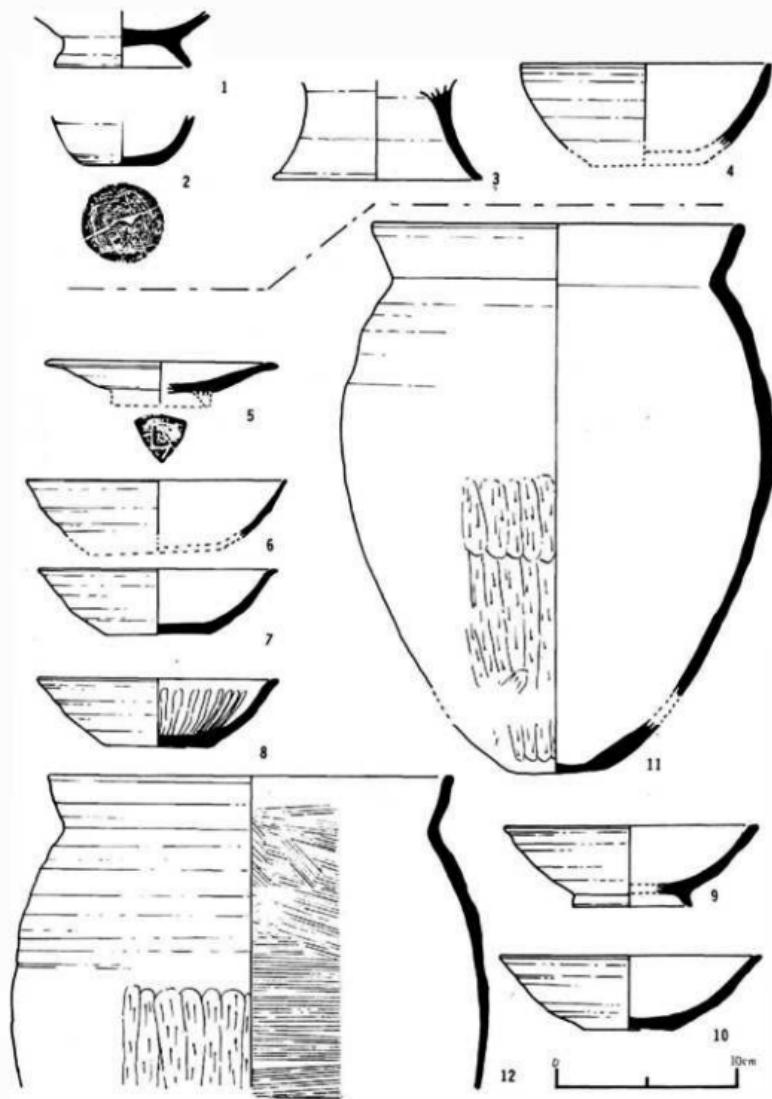




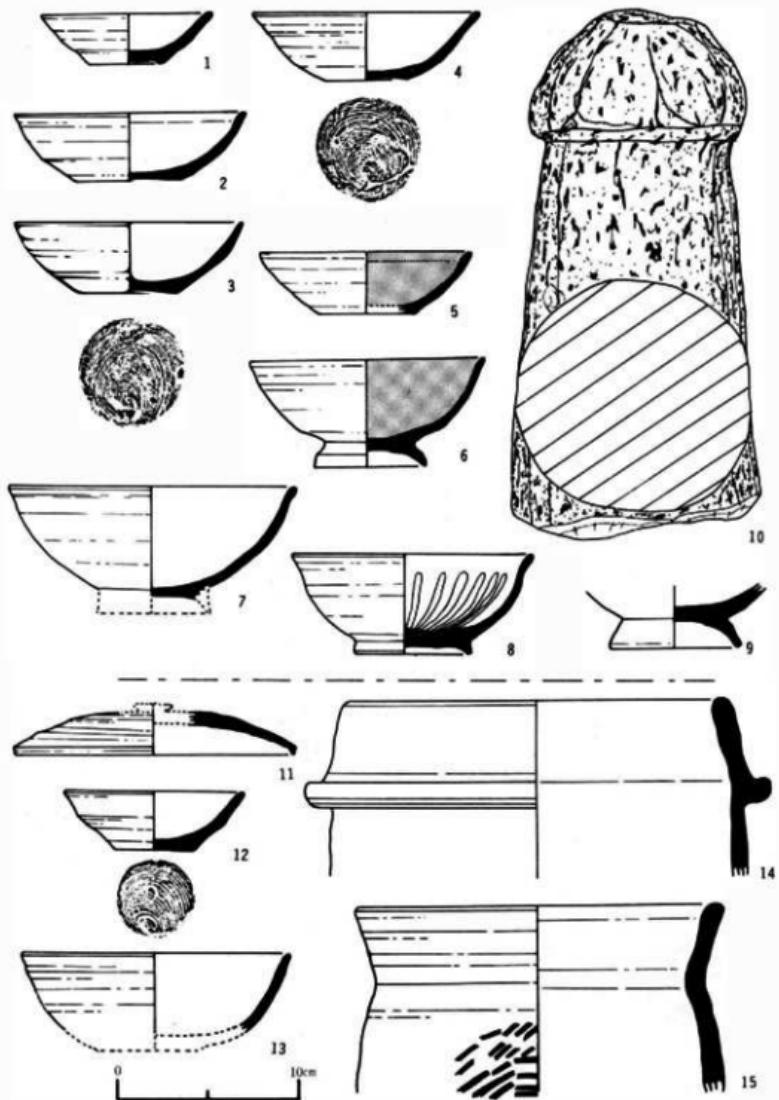
第21図 第12号住居址出土遺物（1：3）



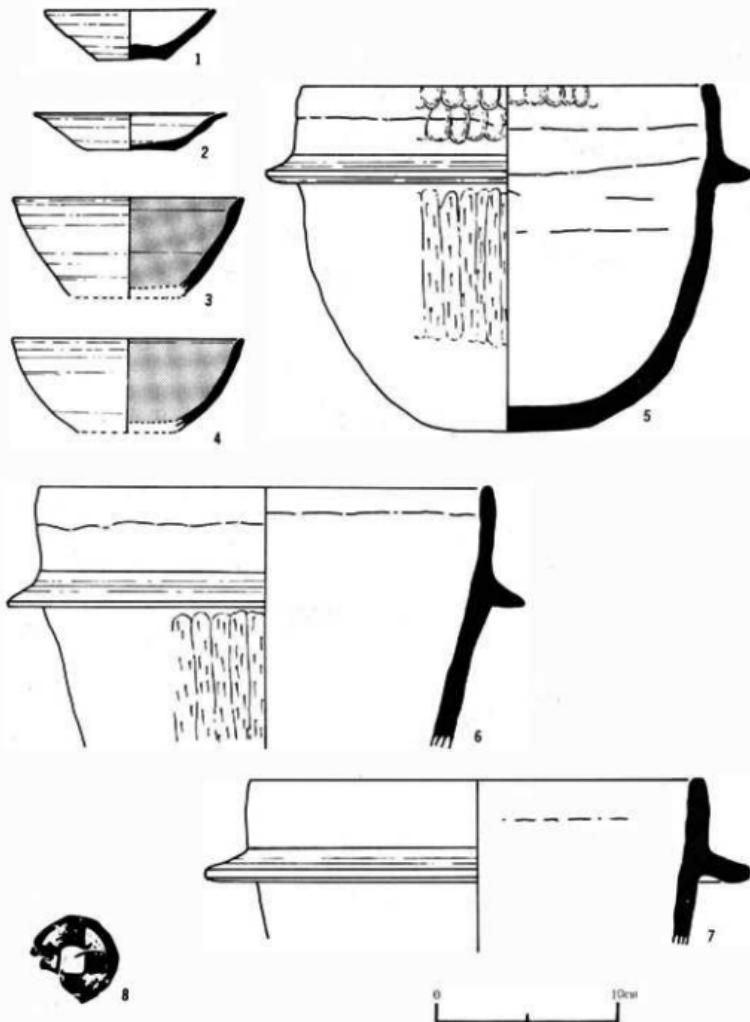
第22図 第12号住居址出土遺物 (1 : 3)



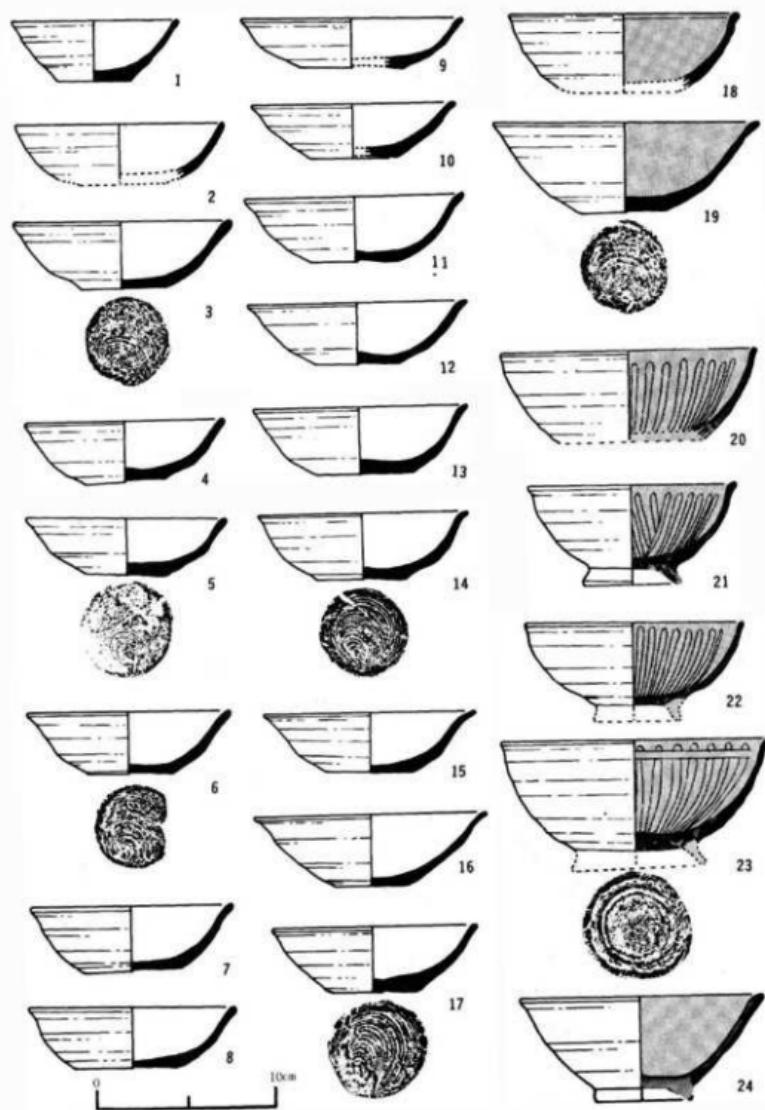
第23図 第13号（1～4）・14号（5～12）住居址出土遺物（1：3）



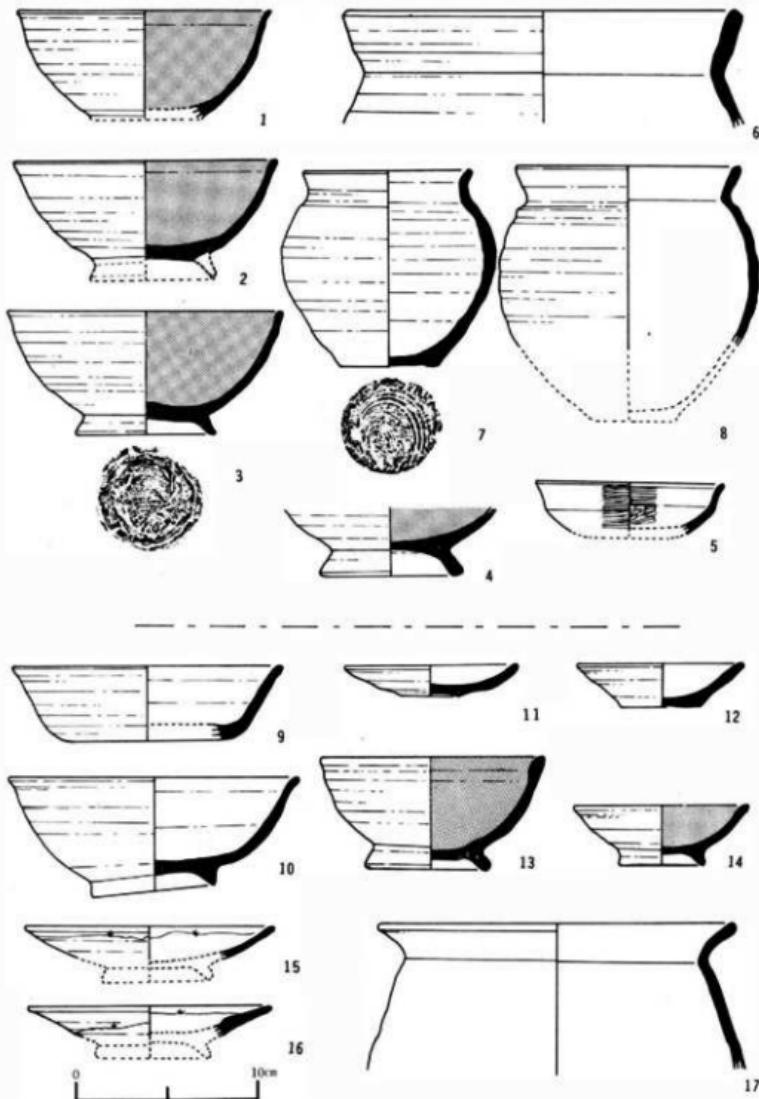
第24図 第15号(1~10)・16号(11~15)住居址出土遺物(1:3)



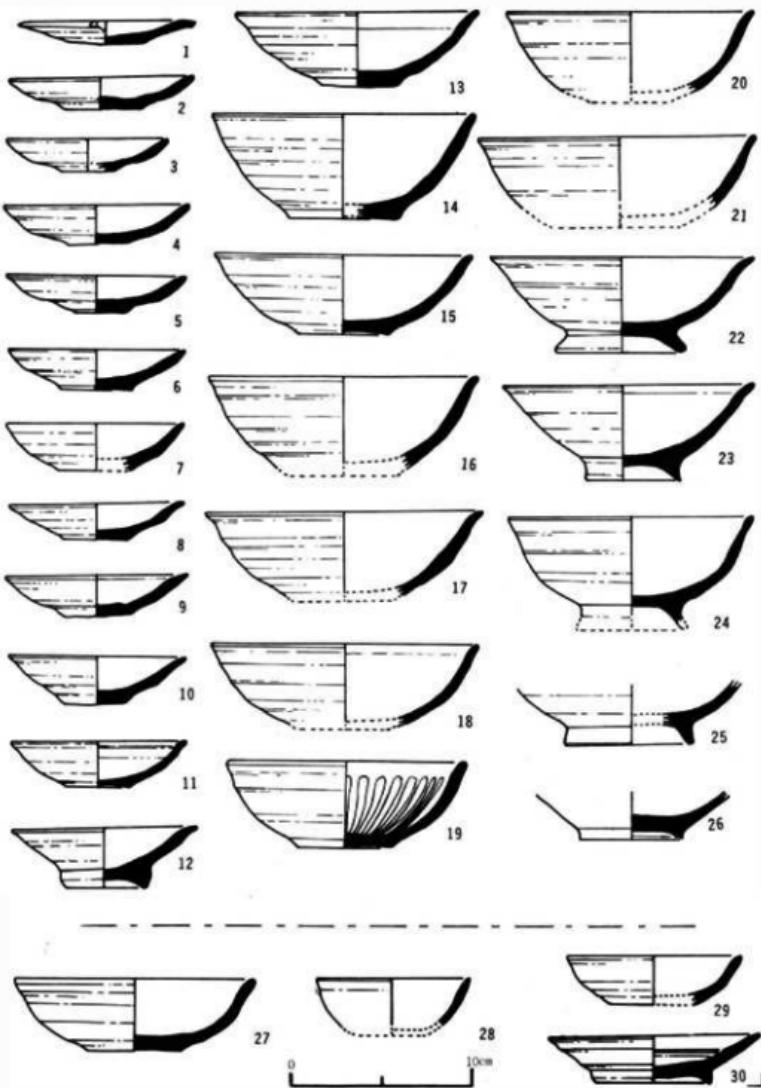
第25図 第17号住居址出土遺物（1：3）



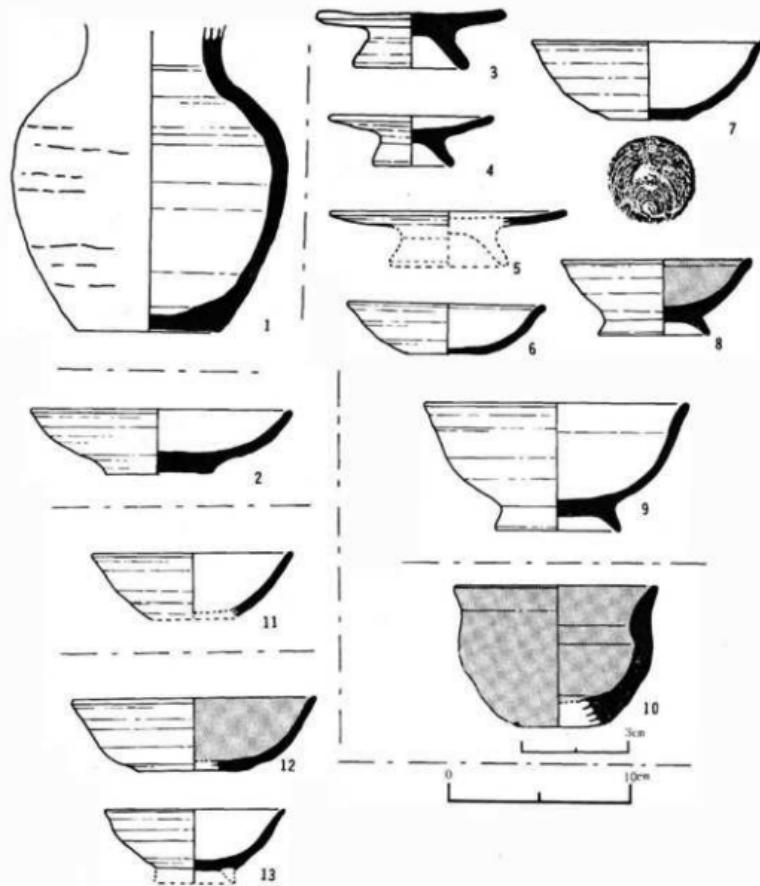
第26図 第18号住居址出土遺物(1:3)



第27図 第18号（1～8）・19号（9～17）住居址出土遺物（1：3）



第28図 第20号（1～26）・21号（27～30）住居址出土遺物（1：3）



第29図 井戸址(2)・第2号(3~10) 第3号(11)土壤・その他(1・12・13) 出土遺物(1:3)

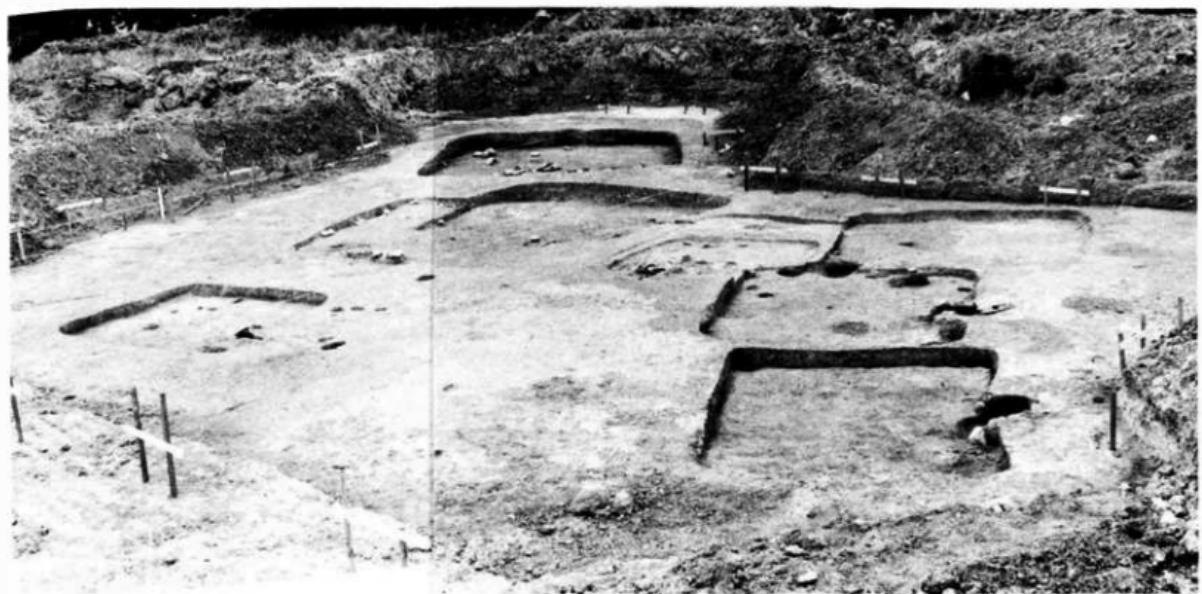
第一圖版 浅川西条遺跡・神楽橋遺跡遠望・調査地近影



1. 浅川西条・神楽橋遺跡遠望



2. 調査地



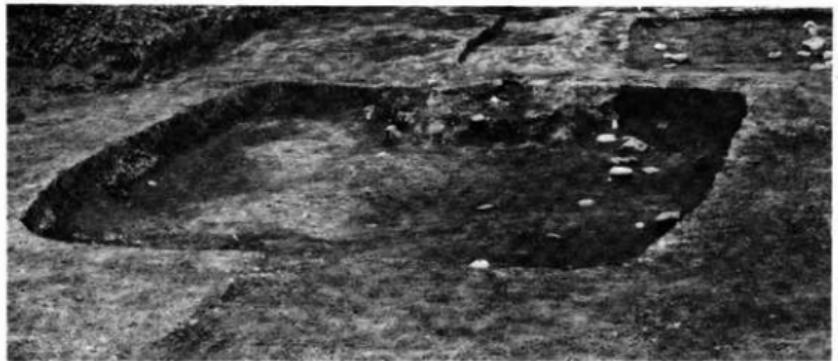
3. 第2号~10号住居址



4. 第1号住居址



5. 第2号住居址



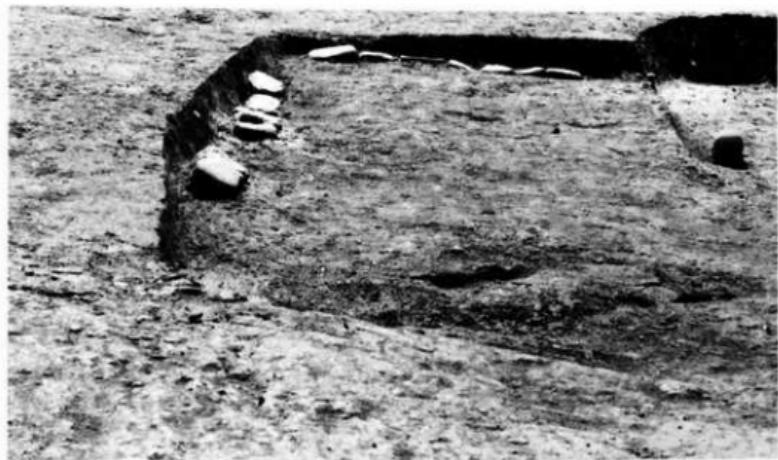
6. 第3号住居址



7. 第3号住居址カマド付近



8. 第3・4号住居址



9. 第4号住居址

第五図版 第四号住居址列石・カマド・第五号住居址



10. 第4号住居址列石

11. 第4号住居址カマド



12. 第5号住居址



13. 第5号住居址出土灰釉陶器



14. 第5号・6号住居址



15. 第7号住居址



16. 第8号住居址



17. 第9号住居址



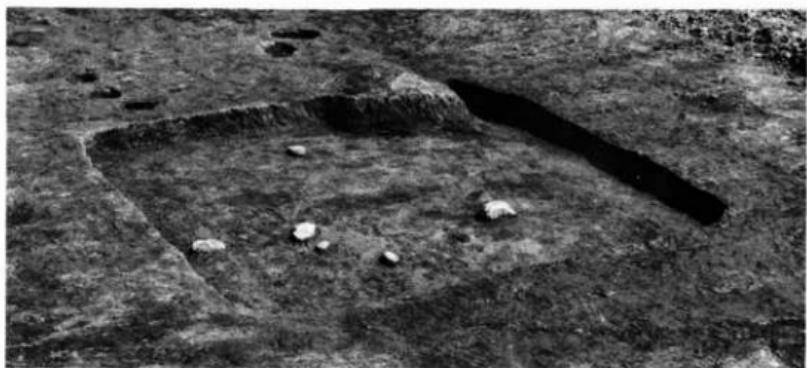
18. 第9号住居址カマド



19. 第8号住居址カマド



20. 第10号住居址カマド



21. 第10号住居址



22. 第5～8号住居址の切り合い



23. 第11—14号住居址



24. 第11号住居址



25. 第12号住居址



26. 第12号住居址土器出土状態

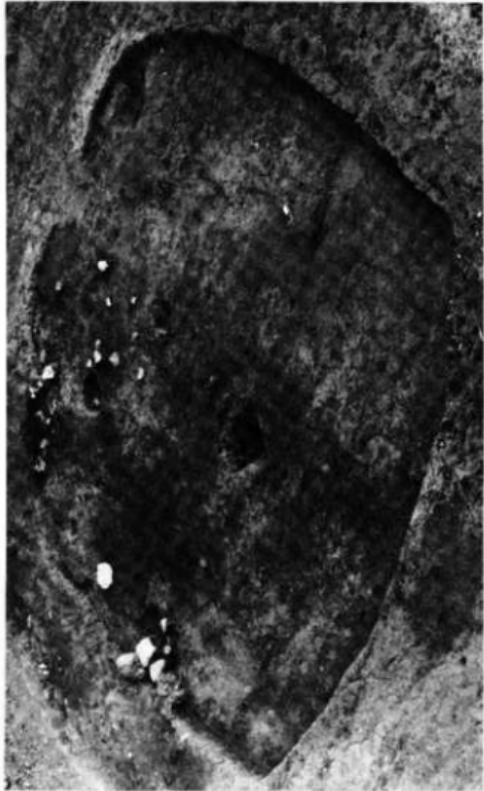


27. 第15号住居址カマド

第一圖版 第一五・一七號住居址



28. 第15號住居址



29. 第17號住居址



30. 第16号住居址



31. 第18号住居址



32. 第18号住居址土器出土状態





33. 第19—21號住居址



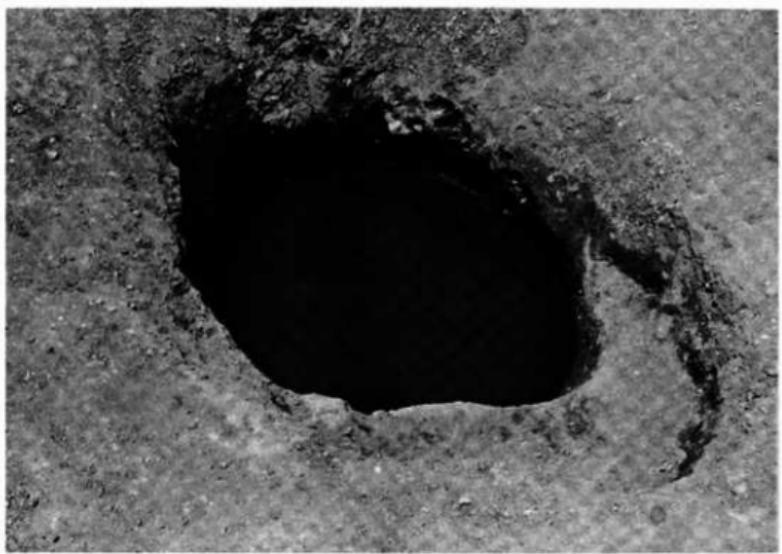
34. 第19號住居址



35. 第20號住居址



36. 第21號住居址



37. 井戸址



38. 第1号工壙



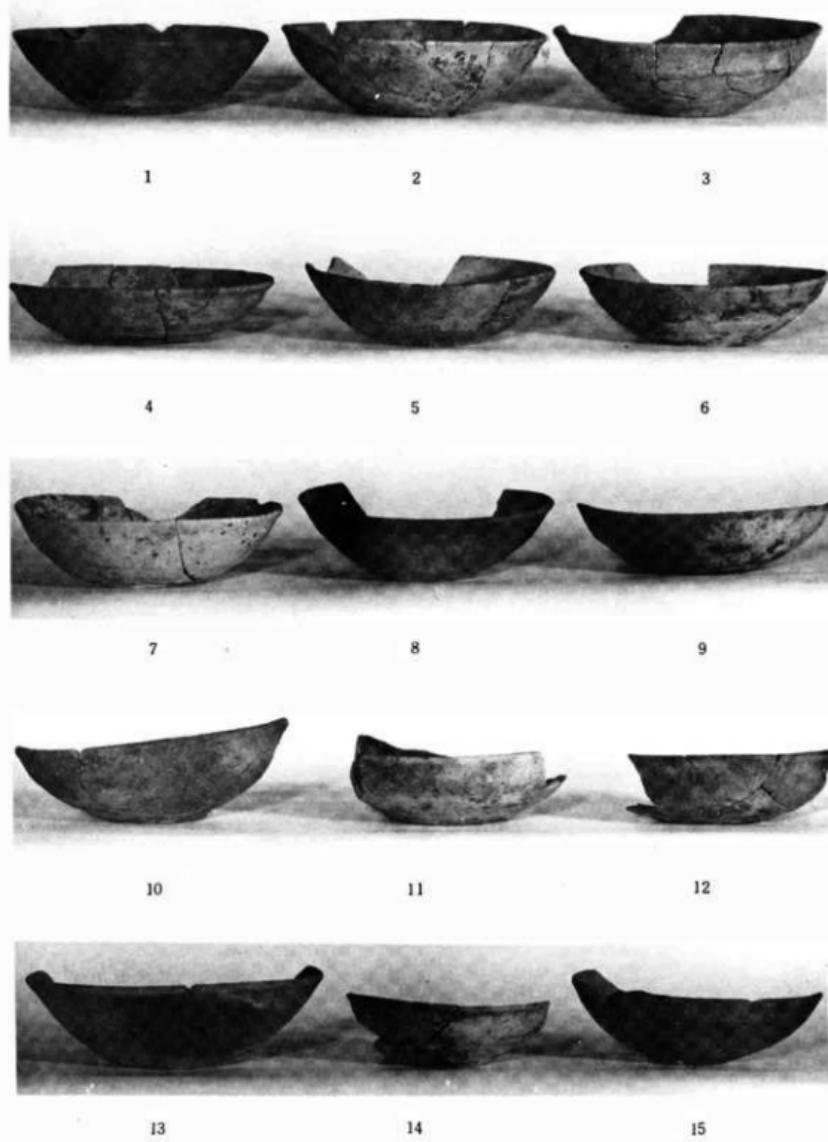
39. 第2土壤

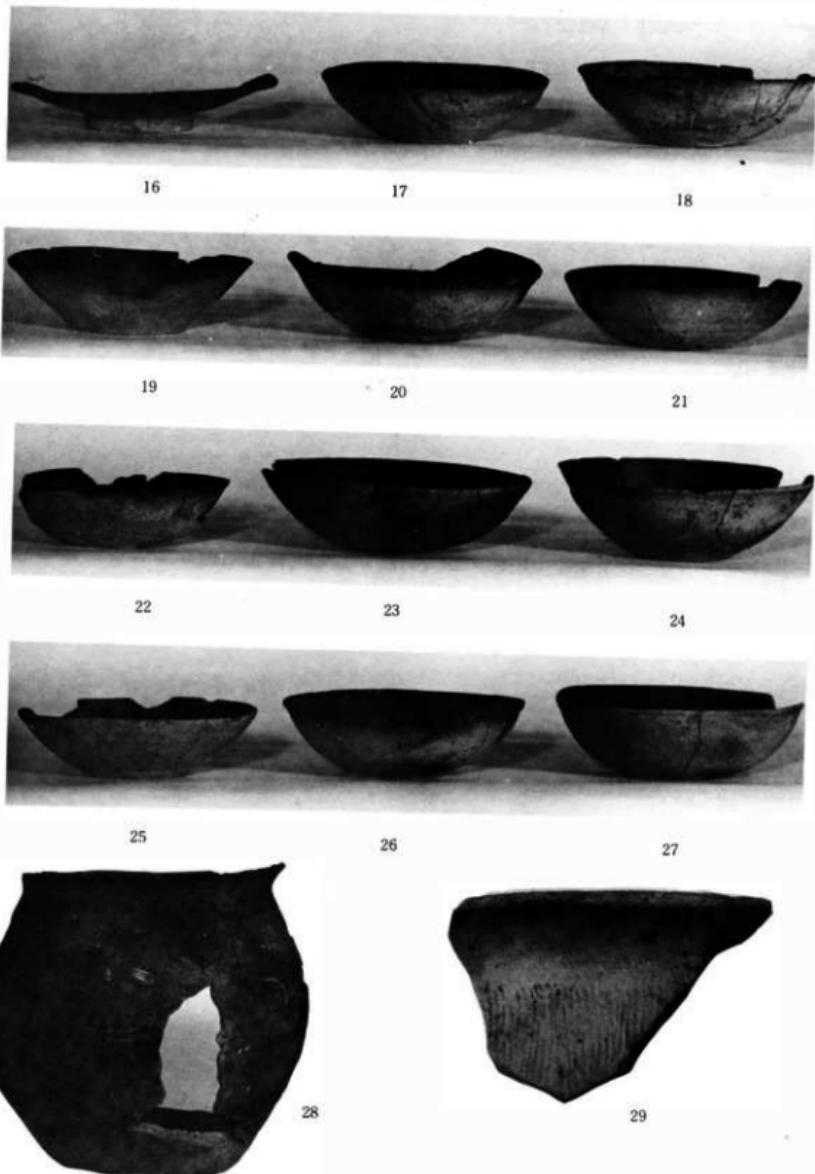


40. 第3土壤



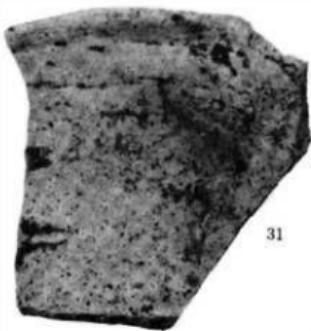
41. 第4土壤



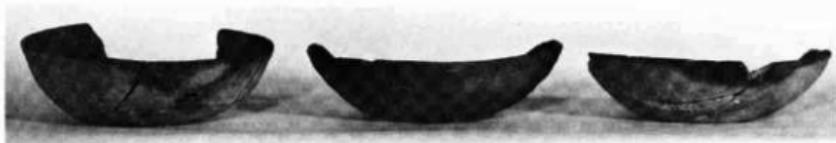




30



31



32

33

34



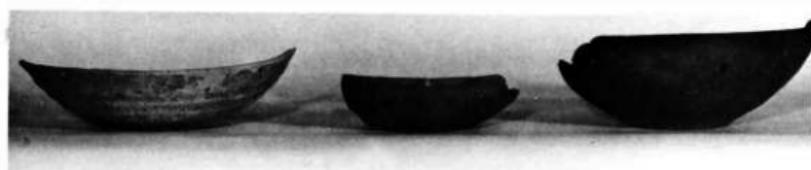
35



36



37



38

39



40



41



42



43



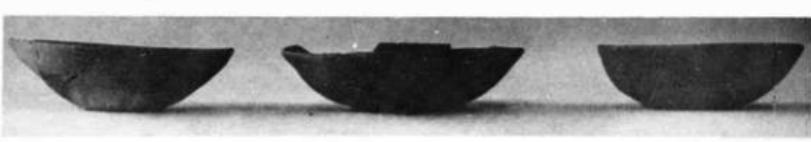
44



45



46



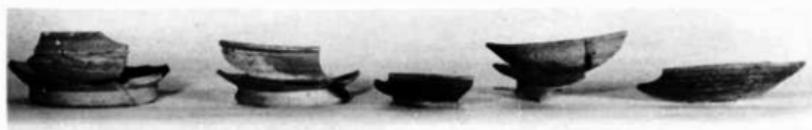
47



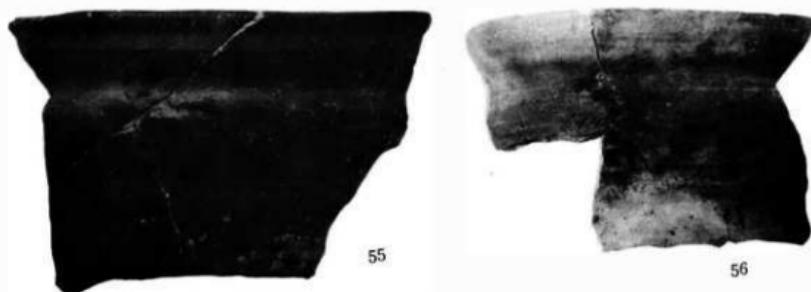
48



49



50 51 52 53 54



55 56



57 58



59 60



61



62



63



64

第二三図版 第一五・一六号住居址出土遺物



65

66

67



68



69



70



71



72



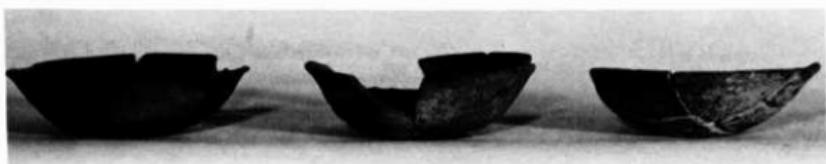
73



74

75

76



77

78

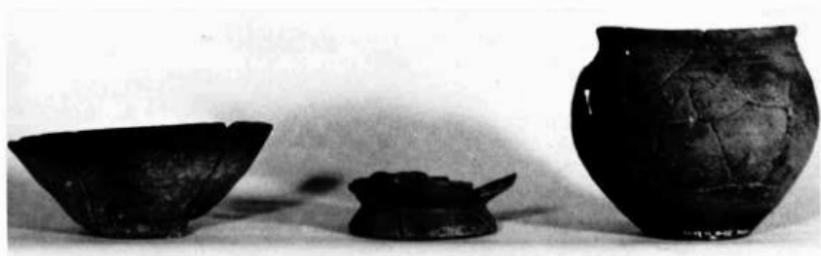
79



80

81

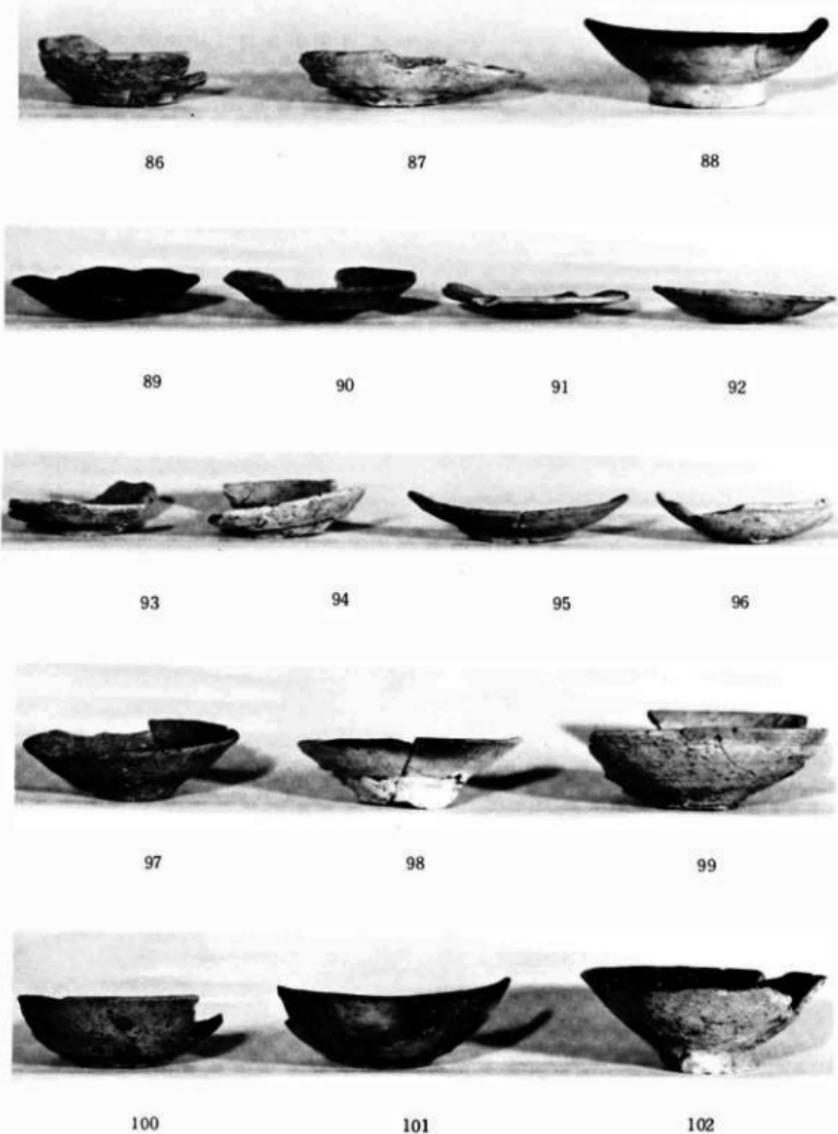
82



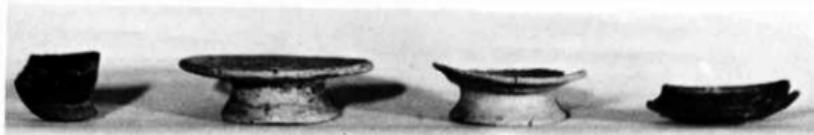
83

84

85



第二七図版 井戸址・第一号土壙・その他出土遺物



103

104

105

106



107

108

109



110

111

112



113



114



115



116



117



118



119. 調査地遠望 (東より)



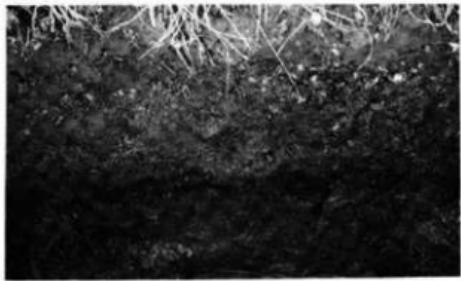
120. 分布調査



121. 分布調査



122. 襲形土器出土状態



123. 土層



124. 結團式



125. 調査



126. 調査



127. 長野市西部中生徒見学

長野市の埋蔵文化財第2集

浅川西条

—長野市に於ける扇状地形上の平安時代集落—

昭和51年3月25日印刷

昭和51年3月30日発行

著者 米山一政
小林享他

発行者 長野市教育委員会

長野市西和田470
印刷所 信毎書籍印刷株式会社